

紀要

■設立40周年記念号

- 【小特集】東近江市相谷熊原遺跡をめぐって—縄文時代草創期の遺構と遺物**
- 「矢柄研磨器」雑考 —相谷熊原遺跡を理解するために— ……松室 孝樹(1)
- 鈴鹿山中の遺跡にみる選地の原理 —相谷熊原遺跡の理解に向けて— ……重田 勉(9)
- 土偶の機能・用途に関する理解の移ろい ……瀬口 眞司(15)
- * * *
- 高島市今津町弘川B遺跡出土の縄文土器(2) ……小島 孝修(28)
- 草津市志那湖底遺跡出土岩田第4類土器群の様相 ……小竹森直子(42)
- 近江・湖東北部の埴輪 ……辻川 哲朗(48)
- 製鉄炉の設置方法について —源内峠遺跡1号製鉄炉の検討— ……大道 和人(73)
- 古代建築物構造ノート —掘立柱の再考— ……横田 洋三(81)
- 塩津起請文札と勧請された神仏 ……濱 修(86)
- 三重県桑名市西方廃寺出土の飛雲文軒瓦について
—桑名市博物館所蔵品より— ……中西 常雄(92)
- 観音正寺と観音寺城跡(2) ……伊庭 功(95)
- 遺跡出土の化粧道具に関する覚書 —夏見城遺跡出土の毛抜きから— ……堀 真人(103)
- 将棋史研究ノート(5) 金将の役割 —金将の動きと配置から— ……三宅 弘(116)
- 「忍者」研究の現状と課題 ……阿刀 弘史(120)
- 文化遺産としての琵琶湖
—「水」を介した人類と自然の永続的共生を示す資産群— ……大沼 芳幸(124)
- 平成22年度滋賀県埋蔵文化財センター考古学体験学習を終えて ……具志堅有紀(142)
- 保存処理30年の記録 ……中川 正人(148)

24

紀 要

第 24 号

—設立40周年記念号—

2011.3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

近江・湖東北部の埴輪

辻川 哲朗

1. はじめに

本稿の目的 滋賀県内出土埴輪については、以前に集成を行い、埴輪編年試案を提示したことがある（辻川2003B）。その後、集成の遺漏が判明した例について随時資料化を進めているほか、前稿において修正を要する点については訂正を行うとともに、資料化がなされている例についても再検討作業を引き続いて行っている。将来的には、その成果に基づいてあらためて総括的な再検討を行うつもりであるけれども、中間報告として、個別の事例について適宜報告を行ってきた（辻川2003A・2006B・2007A・2007B・2009・2010A・2010B・2011）。

本稿は、そうした中間報告の一環として、湖東北部-旧郡での犬上・愛知郡と神崎郡の一部-の埴輪資料を報告し、前稿の補訂を行うことを主たる目的とする。さらに、その結果を踏まえて、当該地域における埴輪の展開過程について素描を試みるとともに、派生する若干の課題についても

触れておきたい。

対象地域の設定（図1） 本稿の対象地域である湖東北部地域とは、律令制下の郡域である愛知・犬上郡域を指して用いる。現在の行政区でいうと、彦根市、犬上郡多賀町・豊郷町・甲良町、愛知郡愛荘町、東近江市（旧愛知郡湖東町・愛東町）が相当する。なお、神崎郡と愛知郡との境界については、現愛知川が市制制定以前の郡界となっていた。しかし、それ以前の郡界は現在の彦根市山河原付近から薩摩付近へ流下していた愛知川旧流路に沿ったものであって、それは律令制下での郡界をおおむね踏襲したものであったと考えられる。そうすると、現在の彦根市南部の一部は、神崎郡域に包括されることになる。今回は、愛知郡・犬上郡の諸事例に加えて、神崎郡域の彦根市ゲホウ山古墳も対象に含めた。後述するように、隣接する愛知郡域の諸事例と無関係ではないと考えたからである。

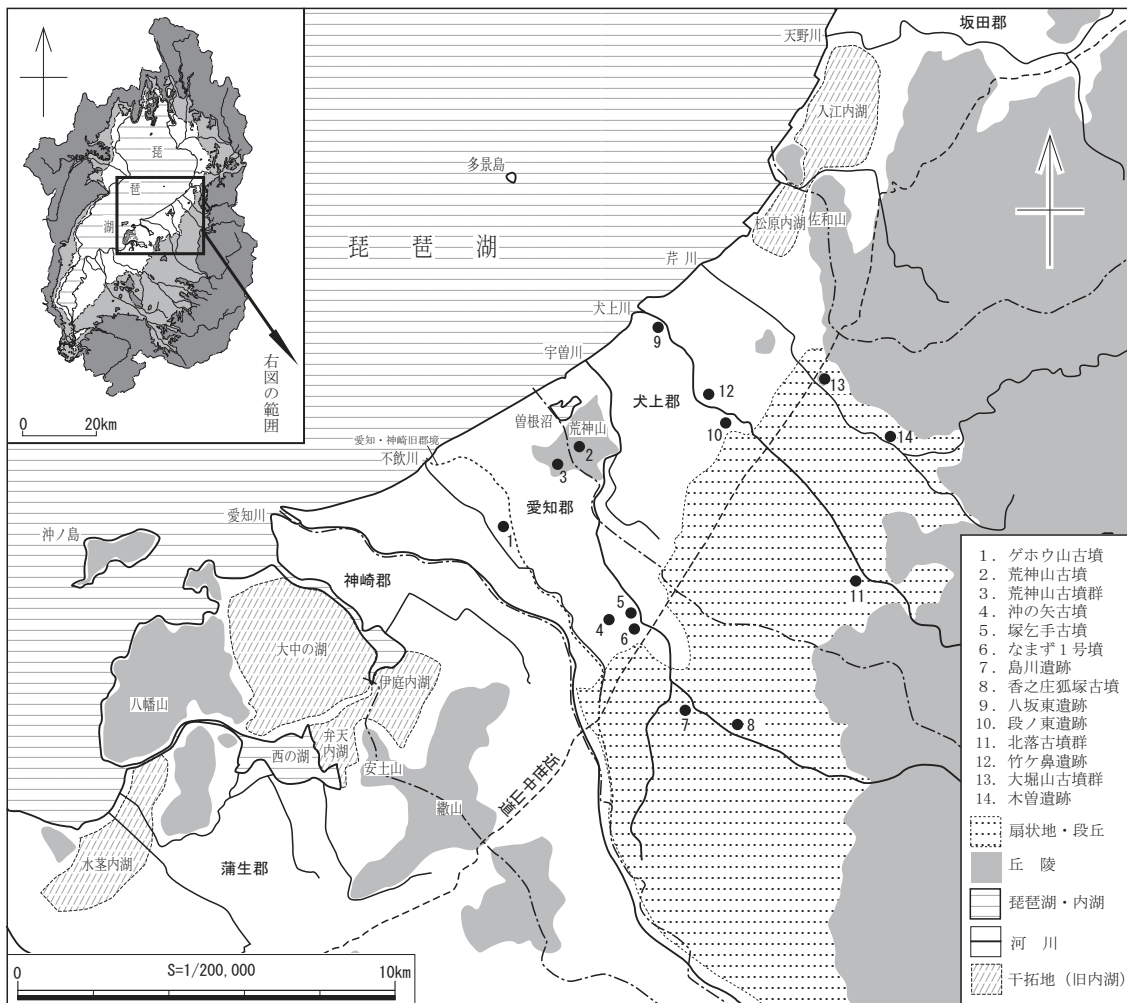


図1 本稿で扱う古墳・遺跡

表1 湖東北部における埴輪（土製立物）・木製立物一覧（番号は図1に対応する。）

番号	遺跡・遺構名	所在地		遺構			埴輪（土製立物）														木製立物			
		旧郡	市町名		種別	墳形	規模(m)	円筒		形象						威儀具				威儀具				
			現市町名	旧市町名 (平成大合併前)				壺	普通	朝顔形	施設		威儀具				動物		不明		威儀具		威儀具	
鏝付壺	普通	朝顔形	家	囲	蓋	盾	鞞	甲冑	大刀	石見型	船	人物	馬	水鳥	鶏	不明	空	髷	石見型	刀	鳥			
1	ゲホウ山古墳	神崎	彦根市	彦根市普光寺町	古墳	方円?	不明																	
2	荒神山古墳	犬上	彦根市	彦根市清崎町	古墳	方円	124																	
3	荒神山古墳群山王谷支群13号墳周辺	愛知	彦根市	彦根市稲枝町	古墳?	不明	不明																	
4	神の矢古墳	愛知	愛荘町	愛知川町長野	古墳	方?	10?																	
5	塚乞手古墳	愛知	彦根市	彦根市肥田町	古墳	円?	不明																	
6	なまず1号墳	愛知	愛荘町	愛知川町なまず	古墳	造円	14																	
7	島川遺跡	愛知	愛荘町	秦荘町島川	溝等	-	-																	
8	香之庄狐塚古墳	愛知	愛荘町	秦荘町香之庄	古墳	不明	不明																	
9	a 八坂東遺跡D2トレンチ落ち込みD217等	犬上	彦根市	彦根市八坂町	落ち込み等	-	-																	
	b 八坂東遺跡溝A I 1				溝	-	-																	
	c 八坂東遺跡A I 遺物包含層				包含層	-	-																	
	d 八坂東遺跡溝B II 591				溝	-	-																	
	e 八坂東遺跡ピットB II 531				ピット	-	-																	
10	a 段ノ東遺跡SX03	犬上	彦根市	彦根市大方町	古墳	方	7+																	
	b 段ノ東遺跡SX04				古墳	方	7+																	
	c 段ノ東遺跡SX01周辺				-	-	-																	
11	北落古墳群X2周濠	犬上	甲良町	甲良町北落	古墳	円	13																	
12	竹ヶ鼻廃寺4次SD13	犬上	彦根市	彦根市竹ヶ鼻町	溝	-	-																	
13	大堀山古墳群	犬上	彦根市	彦根市大堀町	古墳	円	-																	
14	a 木曾遺跡SP0302	犬上	多賀町	多賀町木曾	ピット	-	-																	
	b 木曾遺跡SK0301				土坑	-	-																	

〔凡例〕 *1 墳形：前方後円墳→方円、帆立貝式古墳→帆立、造出し付き円墳→造円。
 *2 網掛けは可能性のあるものを指す。普通円筒埴輪の網掛けは朝顔形埴輪との区別がつかない例を示す。

2. 出土・採集事例（図1・表1）⁽¹⁾

（1）ゲホウ山古墳出土埴輪（図2）

古墳（北村他1995）ゲホウ山古墳は彦根市普光寺町地先の平野部にある。1993（平成5）年度の土地改良総合整備開発事業（給水管路工事）に伴う発掘調査において、幅約3.7m、深さ約0.16mの浅い落ち込み状遺構（T1401）が検出された。遺構内からは、多数の埴輪片・須恵器（杯身）・土師器（壺・甕）が出土した。報告者は、浅い落ち込み状遺構が古墳周濠の一部に相当する可能性を指摘している。確かに、検出地点（小字高木）の北西に隣接して小字「塚尻」があるほか、『近江愛知郡志 卷壱』（中川編1929）に掲載された郡内塚地名一覧には「葉枝見村 普光寺（高木ヶホー山）塚丸 塚立」（同：p79）という記載がある。これらの塚地名から、検出地点周辺に古墳が存在したとみて大過ない。

墳形・規模については不明であるものの、田中勝弘氏は、1873（明治6）年頃に作成された「近江國神崎郡普光寺村地引絵図」に不整形の地形が認められることから、全長50m程度の前方後円墳を想定している（田中2007）。

埴輪 円筒埴輪（普通円筒）・形象埴輪（人物・馬・鶏・蓋）がある。

〔円筒埴輪〕普通円筒埴輪は全形が判明する例がないので、比較的遺存状態のよい例を中心に様相を記述する。

〔形態・段構成〕①口縁部下段に円形スカシを配置する例（1～3・6・7）があること、②胴部が3段遺存する例（4）では、各段に円形スカシ2孔が千鳥状に配置されて

いることからみて、少なくとも4突帯5段構成に復元することができる。

〔法 量〕口径30cm程度に復元できる。器高については、次に述べるように各段の間隔を10cm程度と見積もると、おおむね50cmになると思われる。

〔突 帯〕断面形状は低平な台形を基調とする。突帯間隔は、底部高10.3・12.1cm、胴部9.4～14.3cm、口縁部高7.5～12.5cmである。総じてバラツキが大きい。このことから、突帯設定に関わる器面痕跡を見いだせないものの、無指標方式による突帯間隔設定であった可能性が高いと考える。貼付はナデによる。明確な断続ナデは確認できなかった。

〔スカシ〕確認しえたスカシはすべて円形であり、配置については先述したとおりである。

〔口縁部〕ほぼ直立するか、緩やかに外反傾向を示す断面形状である。上端面はナデによる面を作り出す。

〔内外面調整〕外面調整は、タテハケもしくは左傾ナメハケ調整による。いずれも突帯貼付ナデに切られており、一次調整とみなしうる。内面調整として、ナデ・タテハケ・左傾ナデ調整が確認できる。それらを併用した例も多い。

〔底部調整〕外面底部下半でタテハケ調整が消されている例があり、板状工具によって器面を押圧した底部調整の痕跡とみることができる。

〔焼 成〕いずれも土師質無黒斑焼成品である。

〔ヘラ記号〕口縁部外面に「逆U字+直線」からなるヘラ記号を加えた例（2）がある。

〔形象埴輪〕馬形埴輪（9～14）・人物埴輪（15）・蓋形埴



図2 湖東北部の埴輪 (1:ゲホウ山古墳)

輪（16）・鶏形埴輪（17）がある。

〔馬形埴輪〕頭部（9）・体部（10）・脚部（11～14）がある。9は頭部付近の破片で、円形の眼部表現と、粘土帯による引き手表現がある。10は大きく湾曲する破片で、体部に相当する可能性が高い。内外面ともにナデによって調整する。12・13は、外径8～11cm程度の円筒形を呈する脚部である。外面はタテハケ、内面はナデによって調整する。下端部に半円形の削り込みがある。14は下端径がやや大きい。12・13と同様に下端部に半円形の削り込みを加える。

〔人物埴輪〕15は腕部片である。粘土棒をナデによって調整している。一端は破損しているが、もう一端には剥離痕があり、胴部との装着部にあたる。

〔蓋形埴輪〕16は立ち飾りである。円筒形ソケット部上方に4枚の粘土板からなる立ち飾りがつく。立ち飾りは、中央の結合部とその外側二箇所に半円形の削り込みを加える。下端は内湾しつつ上方に延びており、削り込みはない。外側の削り込み付近にタテ方向の沈線がみとめられる。それ以外に、施紋は確認できない。各面ともにナデによって調整される。ソケット部は、上端が外方に大きくひろがるラップ状を呈する。

〔鶏形埴輪〕17は、ほぼ全形をうかがいうる。頭部には鶏冠の表現があり、尾部付近には平行沈線による尾羽が表現される。脚部は線刻により表現され、板状の止まり木が付加されている。

〔須恵器〕埴輪群が出土した落ち込み状遺構 T1401からは、

埴輪と混在して、須恵器杯身・土師器壺・土師器甕等が出土している。これらと埴輪との一括性については確言しえないけれども、参考までに須恵器杯身（18）について示しておきたい。18は杯身である。受け部径は約16.2cmをはかり、底部外面には回転ヘラケズリを施す。おおむねMT15・TK10型式に併行するものと思われる。

（2）荒神山古墳出土・採集埴輪（図3・4）

古墳（谷口他2010） 荒神山古墳は、彦根市清崎町・日夏町・三津屋町・石寺町地先の荒神山丘陵上にある。彦根市教育委員会によって、平成15～20年度にかけて、遺跡範囲の確認を目的とした発掘調査が4次にわたって実施された。調査結果については、すでに報告書が刊行されている。埴輪 円筒埴輪（普通円筒・朝顔形）・鏝付壺形埴輪・形象埴輪が出土している。

〔円筒埴輪〕普通円筒埴輪と朝顔形埴輪からなる（図4-1～14）。鏝付円筒埴輪は確認できない。以下、詳細は報告書に譲り、概要を述べることにする。なお、底・体部片では朝顔形埴輪との区別がなしがたいので、ここでは一括して記述する。

〔形状・段構成〕現状では、3段目まで遺存する例があるだけで、全形をうかがいうる資料はなく、段構成をしりがたい。今のところ判明するのは、①口縁部下段にスカシが配置される、②2段目にスカシが配置されるものと、そうでないものがある、③底部にスカシが配置される例はな

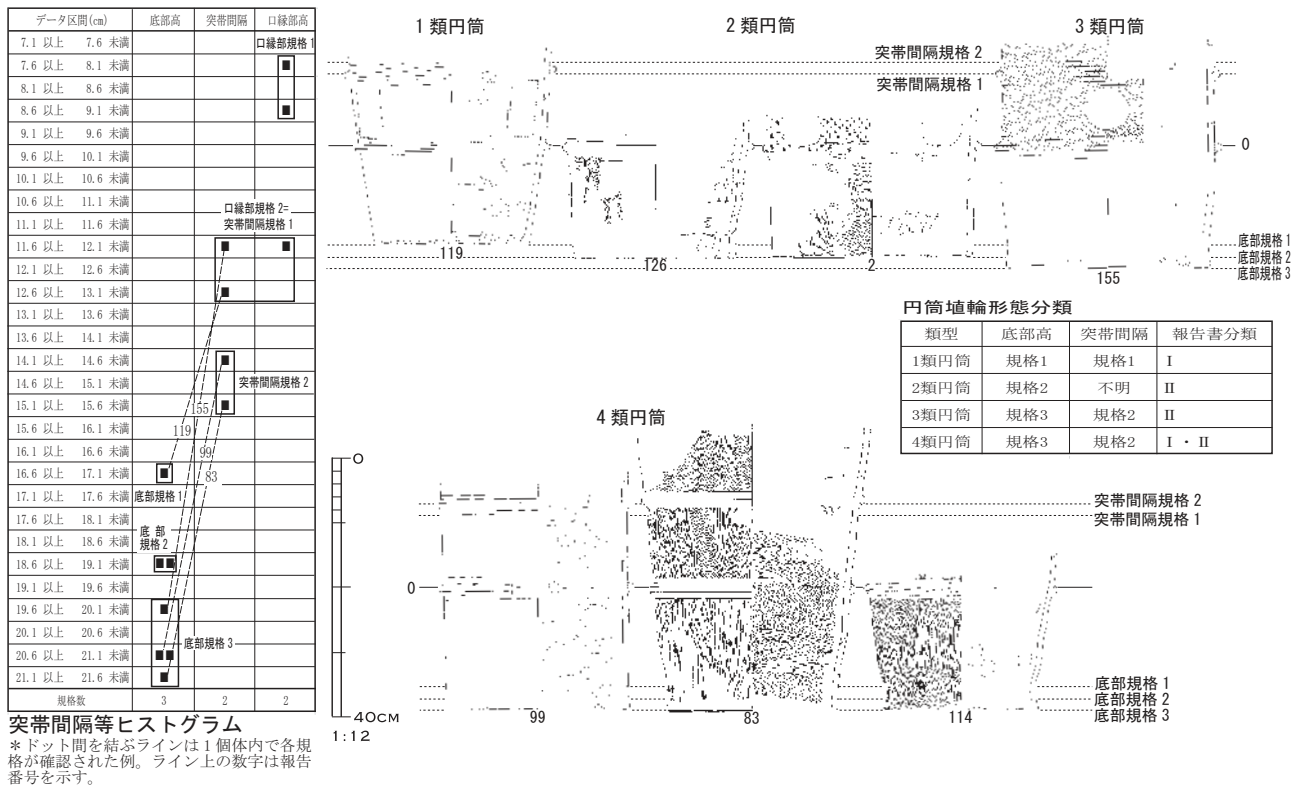


図3 荒神山古墳出土円筒埴輪の底部高・突帯間隔の規格



図4 湖東北部の埴輪（2：荒神山古墳）

い、という点である。

〔法量〕口径は約30～44cmに復元できる。底径は22～37cmと幅があるものの、26～29cm程度の例が多い。各段の間隔についてヒストグラムを作成したところ、複数の規格が見いだせた(図3)。底部高は約17～21cmに分布し、3規格がみとめられる。突帯間隔については、約12～15cmに分布

し、2規格がみとめられる。口縁部高については、約8～9cmと約12cmの2規格がある。それぞれの規格の組み合わせから、1～4類に分類できる。

〔口縁部〕断面形状に着目すると、全体に直立気味のものと、外反気味のものとに大別され、さらに端部を外方に屈曲させるなど端部への意識の程度で細別できる。報告書で

は5パターンに分類している。

〔突 帯〕断面形状は、台形もしくはM字形を基調とし、突出度合で細別できる。総じて小ぶりであり、精緻な印象を受ける。突帯の剥離面には刺突・凹線が確認される。また、底部外端面や突帯上辺に、突帯間隔設定のさい工具が接面した痕跡があることを考えあわせると、突帯間隔設定手法A・B手法（辻川2003C）が用いられていたとみて間違いはない。

〔スカシ〕方形・円形が確実に存在し、逆三角形もしくは半円形も存在する可能性がある。段間に2孔が配置される。

〔内外面調整〕外面調整として、ナデ・タテハケ・ナナメハケが確認できる。いずれも一次調整であり、確実な二次調整は確認できない。内面調整には、ナデ・ナナメハケ・ヨコハケ調整がみとめられる。

〔焼 成〕黒斑を確認できるので、野焼き焼成であることは確実である。

〔赤 彩〕赤色顔料が認められる例がある。底部を除く外面への塗布を基調とする。口縁部は内面にも塗布される。

〔分 類〕報告書では、外面調整等の各属性に着目して、I・II群に大別している。I群は外面ナデ調整を基調とするもので、突帯間隔設定はB手法による。スカシ形状は方形を主体とする。一方、II群は外面調整がタテハケ・ナナメハケ調整を基調とするもので、口縁部・突帯の断面形状が多様であり、突帯間隔設定はA手法による。スカシ形状は円形を主体とする。

【朝顔形埴輪・鏝付壺形埴輪】いずれも全形をうかがいうる資料がなく、口縁部だけでは両者を区別しがたい。よって、区別しえたもの以外は一括して記述する（図4-12・15・16）。12は朝顔形埴輪の肩部～体部片である。外面には比較的明瞭に赤彩が遺存する。15・16は鏝付壺形埴輪の鏝部および円筒部の破片である。円筒部は上開き気味で、円形スカシを配する。鏝部突帯は大ぶりで、断面台形を呈する。16の外面にはタテハケが残り、内面はタテ方向のナデによって仕上げられている。

【形象埴輪】家形埴輪・蓋形埴輪・靱形埴輪・器種不明埴輪がある。いずれも細片のため、詳細をしりがたい。

（3）荒神山古墳群山王谷支群13号墳周辺採集埴輪（図5）遺 跡（辻川他2011）本例は、荒神山丘陵上に展開する後期群集墳である荒神山古墳群内で、最近採集された埴輪である。荒神山古墳群は四つの支群（日夏山・本堂谷・山王谷・本堂谷）といくつかの単独墳から構成される。本例は、このうちの山王谷支群13号墳付近において、地元の方によって採集された。

埴 輪 家形埴輪と器種不明埴輪が採集された。胎土は緻密で、1mm以下の砂粒を多く含む。小片であるため、黒斑が確認できた例は少ない。

【家形埴輪】1は、軸部と屋根部との接合部付近の破片で

ある。軸部は板状で、短辺側の一端がほぼ直角に折れ曲がり、軸部のコーナーとなる。内外面ともに器面状態が不良のため、調整を知りがたいもの、ナデを基調とするようである。軸部と屋根部との接合は、軸部先端をやや外側に肥厚させるために粘土帯を付加した後に屋根部を接合し、接合部外側に補充粘土を付している。

2は屋根部の頂部付近の破片である。横断面がU字形に屈曲する。外面には棟押さえの粘土帯の剥離痕が残る。外面は、器面状態が不良のため、調整を知りがたい。内面はナデを基調とし、屋根の折り曲げに伴う皺状のクラックがみとめられる。外面の一部に赤色顔料がわずかに遺存する。

3は軸部の破片である。短辺側の一端がほぼ直角に屈曲し、軸部のコーナーとなる。内外面は、器面状態が不良であるため、調整をしりがたい。外面下端付近に赤色顔料がわずかに遺存する。

4は軸部裾廻り突帯付近の破片である。裾廻り突帯は剥落している。内外面ともに、器面の遺存状態が不良のため、調整の詳細は不明である。外面の裾廻り突帯上方には、竹管文が確認された。

5は、断面L字形を呈する裾廻り突帯片である。突帯の上・側面に、それぞれ竹管文・綾杉文が施される。突帯上面には、竹管文が約1.5～2cm間隔で押圧される。側面の綾杉文は線刻によって施される。内外面ともに器面調整はナデ調整による。

6は軸部の裾廻り突帯付近の破片である。裾廻り突帯は剥落している。内外面ともに器面の遺存状態が不良であり、調整の詳細を知りがたい。裾廻り突帯の上方には、スカシのコーナー部を確認することができた。

7は軸部の底部付近の破片である。軸部裾付近に相当する。底面から3.5cm程上方に裾廻り突帯の剥離痕が認められる。短辺の一端がほぼ直角に屈曲し、コーナー部分となる。それと相對する一端にはスカシが一部残っている。内外面ともに器面の遺存状態が不良であり、器面調整の詳細は判然としなない。底部付近に黒斑が確認できる。

【器種不明埴輪】8は板状を呈する破片である。三辺に剥離面を残す。内外面ともにナデ調整による。

9は突帯片である。横断面にはほとんど曲率がなく、板状を呈する。家形埴輪の裾廻り突帯部分の可能性はある。内面は剥離により原形を失っている。器面の遺存状態が不良であるため、外面調整の詳細は判然としなない。

10は底部付近の破片である。小片のため詳細を知りがたい。遺存部分に限れば、横断面の曲率がほとんどない板状を呈する。外面は器面の遺存状態が不良であるため、調整の詳細を知りがたい。内面はヨコ方向のナデによって調整される。家形埴輪の底部付近に相当する可能性がある。

（4）塚乞手古墳出土埴輪（図6）

古 墳（堀他2010）塚乞手古墳は、宇曾川右岸域の沖積

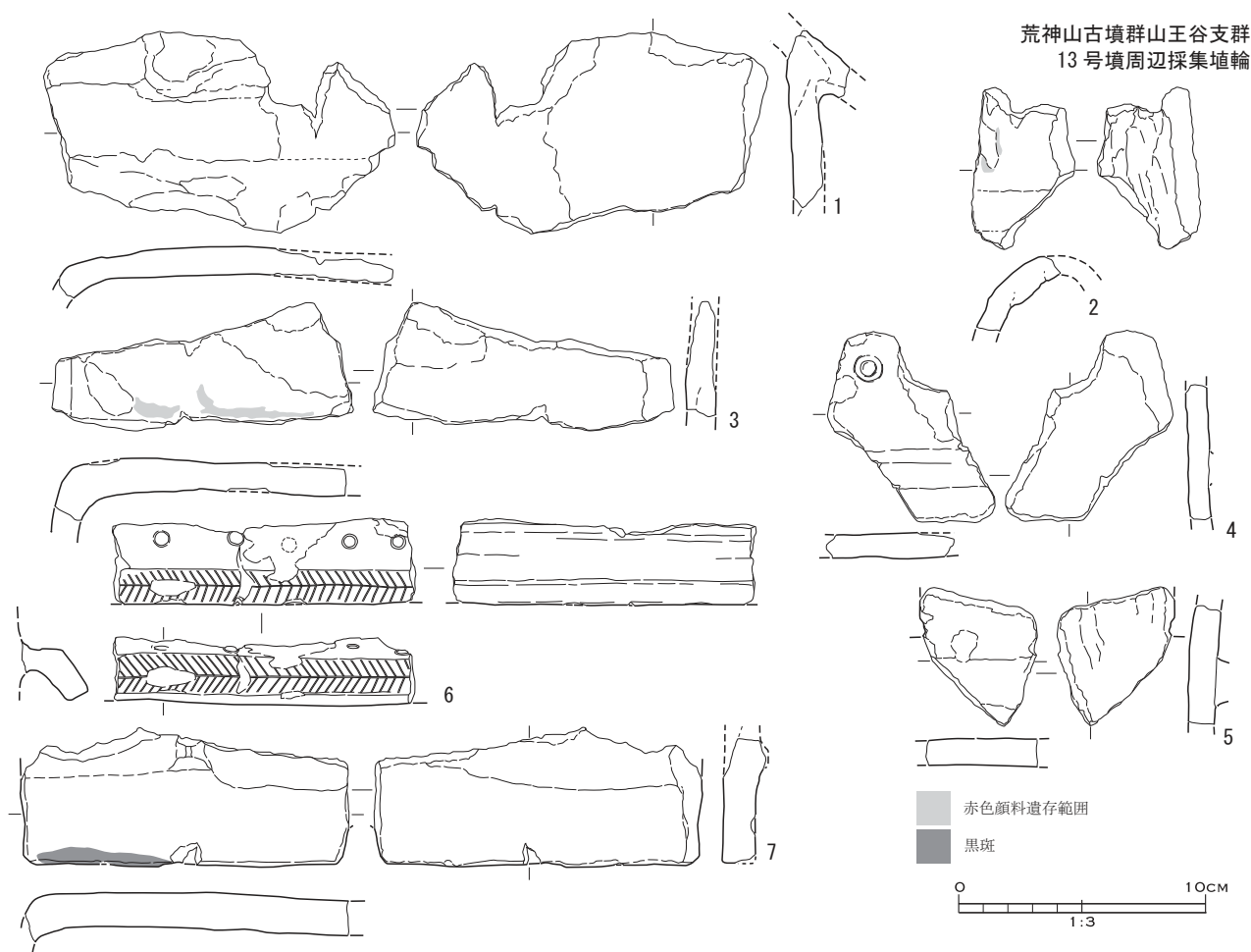


図5 湖東北部の埴輪（3：荒神山古墳群）

平野部に所在する。周辺一帯には、中世城館址である肥田城遺跡が広がる。2007（平成19）年度に、ほ場整備事業に伴う発掘調査が実施され、古墳周濠と思われる溝状遺構内から多数の埴輪等が出土した。調査トレンチが狭小なため、溝状遺構の検出は一部にとどまり、古墳の墳形・規模は確定できていない。

埴輪 出土埴輪には、円筒埴輪（普通円筒・朝顔形）・形象埴輪（馬・家・人物等）がある（辻川他2010）。また、木製立物（鳥・笠）が出土したことも注目される。

〔**円筒埴輪**〕普通円筒埴輪（1～6）と朝顔形埴輪（7）からなる。朝顔形埴輪の確実な事例は1例のみである。しかし、破片資料からは両者を識別しえなかったため、朝顔形埴輪が一定量存在したことは十分に予想できる。

〔**形状・段構成**〕全形を復元できる普通円筒埴輪例（1）は4突帯5段構成品である。2・3・4段目に円形スカシ2孔を交互に配置する。また、普通円筒埴輪の全体的な形状は、ほぼ直立するか、緩やかに外反する円筒形である。

〔**法量**〕復元された口径は約22～29cmである。各段の高さは、口縁部7.6～8cm、胴部（2～4段目）8.6～10.5cm、底部9cmである。突帯の剥離した例がみとめられないので、突帯間隔設定手法を知りたいけれども、おそらく無

指標方式による可能性が高く、おおむね各段を均等にすることが意図されたと考えられる。そうなると器高は45～50cmに復元することができる。

〔**口縁部**〕朝顔形埴輪については該当破片がないので、普通円筒埴輪に限定して述べる。断面形状は、端部に面をもたせた長方形を基調とする。端部の面がナデによって湾曲する等のバリエーションは見いだせるけれども、大きく異なる様相を示す例はみとめられない。

〔**突帯**〕断面台形を基調とする。比較的突出度があり、側辺がナデによって内湾し、断面M字形に近い形態のものもある。断続ヨコナデ技法の確実な痕跡はみとめられない。ただし、突帯下辺に波状の凹部が残る例が一部にあり、ヨコナデと同様のひねりを加えた貼付方式が採用されたことがわかる。ただし、突帯はヨコナデによって比較的丁寧に仕上げられている。

〔**スカシ**〕確認できる例はすべて円形である。先述したように、2・3・4段目に各段2孔を交互に配置する。

〔**底部**〕底部には板オサエによる底部調整を施す例（8～10）と、明確な底部調整の痕跡を残さない例がみとめられる。両者の相違が普通円筒埴輪と朝顔形埴輪による可能性は高いものの、現状では確定できない。

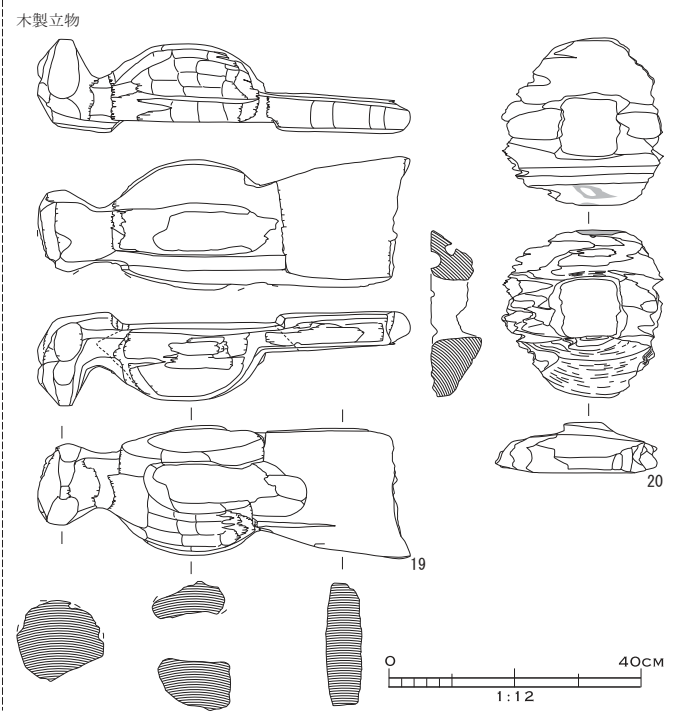
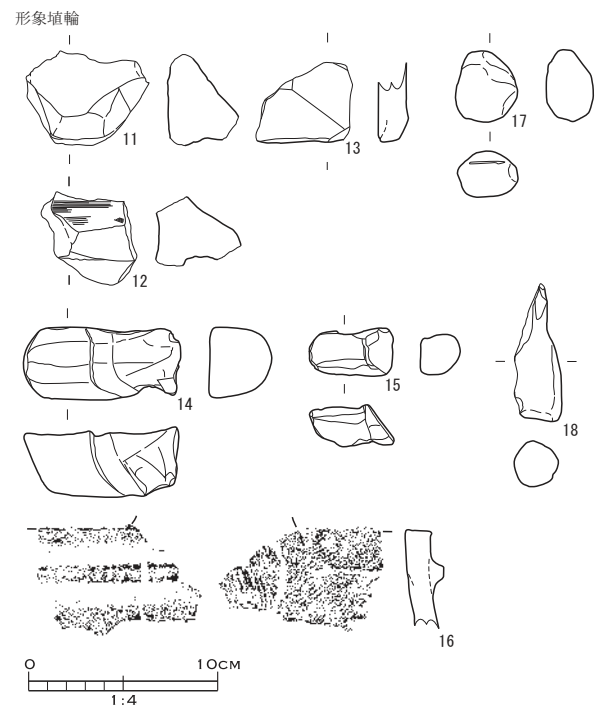
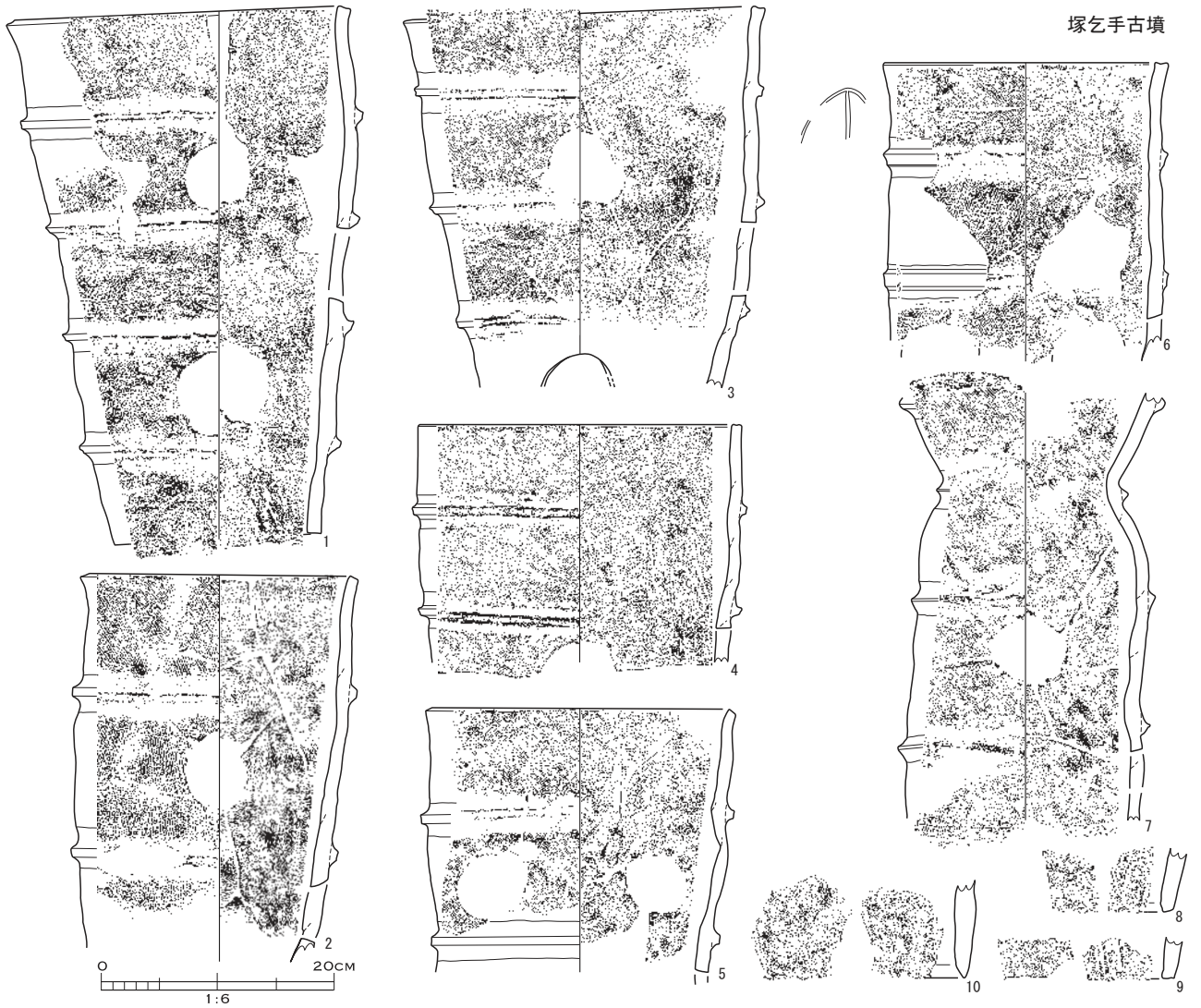


図6 湖東北部の埴輪 (4: 塚乞手古墳)

〔内外面調整〕外面調整は左傾ナナメハケもしくはタテハケ調整を基調とする。いずれも突帯貼付前に施された一次調整であり、確実な二次調整例はみとめられない。内面も同様に左傾ナナメハケもしくはタテハケ調整を基調とし、両者を併用する例や、ナデ調整を加える例もある。

〔ヘラ記号〕普通円筒埴輪の口縁部外面にヘラ記号を施す例がある。6は「逆U字+タテ直線」の組み合わせからなる。それ以外にもヨコ線を加えた例が認められた

〔焼成〕確実な黒斑はみとめられず、窖窯焼成による。色調からみて、橙褐色系の土師質焼成品と青灰～灰色系の須恵質焼成品の両者がある。量的には前者のほうが多い。

〔形象埴輪〕形象埴輪は量的に乏しく、また細片資料を中心とするために、その全容を十分捉えることは難しい。11～15は家屋根部付近の破片である。13は屋根コーナー部分に相当する破片であり、寄棟もしくは入母屋構造の家の存在をしりうる。14・15は棟木部である。法量が異なるので、複数棟の存在を想定しうる。18は人物の鬢片である。17は鈴であり、馬等に付加されたものであろう。以上から、複数棟の家・男性人物・馬等が存在したことがほぼ確実といえる。それ以外にも不明形象品があるので、さらに器種が増加する可能性は高い。

木製立物 翼を広げた滑空する鳥形（19）と笠形（20）がある。鳥形は長さ約59cmを図るもので、胴部には支柱を挿入した方形孔が貫通している。上面には幅24cm・深さ1.5cmの浅い仕口が施され、別づくりの翼が組み合わせられたと考えられる。笠形は径27cm・高さ8cmの截頭円錐形を呈する。中央には支柱を挿入した方形孔が貫通する。

（5）沖の矢古墳出土埴輪（図7）

古墳（北原2008） 愛知川と宇曾川とに挟まれた沖積平野内に位置する。現在では、付近一带は水田地帯となっているけれども、発掘調査では網状に流下する河川群と微高地群が検出されており、現在以上に起伏に富んだ地形であったことがわかる。沖の矢古墳が立地するのも、このような微高地の一つである。検出されたのは古墳の周濠と思われる溝である。部分的な検出にとどまるため、古墳の全形は判然としない。報告者は、直径もしくは直径もしくは一辺が10m程度の円墳もしくは方墳を想定している。周濠内からは埴輪とともに須恵器が出土した。

埴輪 円筒埴輪（普通円筒・朝顔形）がある。大半が破片であるため、普通円筒と朝顔形埴輪と区別しがたい。ここでは確実に両者を識別できるもの以外を一括して記述する。なお、これらの埴輪には黒斑が確認できず、土師質焼成品・須恵質焼成品の両者がみとめられる。

1・2は普通円筒埴輪の口縁部片である。1は突帯を残しており、口縁部高（約11cm）が判明した。口径は23cm前後に復元できる。いずれも、外面は一次調整としてタテハケを施した後に、二次調整としてB種ヨコハケを加えている。B種ヨコハケは突帯間をほぼ1回で施工される。停止痕は正立するものと、左右いずれかにやや傾斜するものがあり、Bc・Bd種ヨコハケ（一瀬1992）が併用されている。内面はいずれもやや左上がりのヨコハケを施す。1の突帯下方には円形スカシの一部が確認できた。突帯は断面M字形を呈する。3・4は底部片である。3は1条目突帯が残り、底部高（約10.5cm）が判明する。外面調整は、3

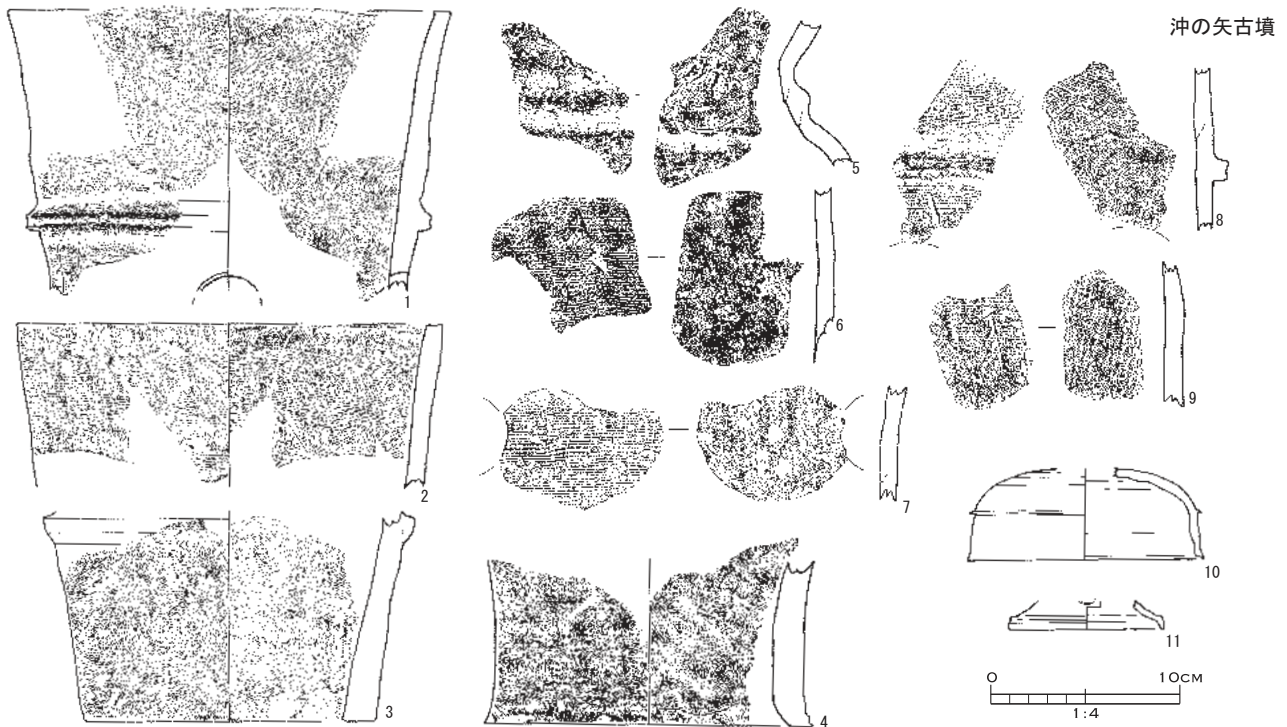


図7 湖東北部の埴輪（5：沖の矢古墳）

の場合ヨコハケ調整を施す。内面はナデによる。5は朝顔形埴輪の頸部片である。頸部には断面台形突帯を貼付する。内外面ともに器面の遺存状態が不良であるため、調整の詳細をしりがたい。6・7・9は体部片である。外面にはB種ヨコハケが明瞭に残る。内面はナデ調整による。7には円形スカシが残る。8は突帯付近の破片である。外面にはB種ヨコハケが残る。内面は下半にナデ調整を、上半に左傾ナメハケを加えている。

須恵器 杯蓋(10)・高杯脚部片(11)がある。杯蓋はTK23型式もしくはTK47型式に併行すると思われる。

(6) なまず1号墳出土埴輪(図8)

古墳(愛知川町史編集委員会編2007) なまず遺跡は、宇曾川左岸下流域付近の扇状地末端部に位置する。数次にわたる調査が実施されており、その結果、縄文時代晩期の土器棺墓・弥生時代中期の方形周溝墓・古墳時代後期の大壁住居等が検出されている。2005(平成17)年度の発掘調査では、古墳3基が確認され、そのうちの1号墳から埴輪が出土した。

1号墳は直径14m程度の円墳である。墳丘は削平され、周濠のみが検出された。墳丘の西側には、周濠の一部を陸橋状に掘り残した部分がある。周濠内からは多量の埴輪が出土した。大半は円筒埴輪であり、形象埴輪として馬形埴輪がある。この馬形埴輪は「陸橋部」付近から出土した。
埴輪 本例は正式報告書が未刊行である。しかし、今回愛荘町教育委員会のご厚意により資料調査を行い、実測図を掲載することを許可いただいた。

【普通円筒埴輪】整理中のため、あくまで現時点での見解にとどまるものであるものの、少なくとも2突帯3段構成品(1)と3突帯4段構成品(2)の二種が存在する。

1は2突帯3段構成品である。器高約37cm・口径約30cm・底径約18cmを測る。底部高約20cm・突帯間隔約9.5cm・口縁部高約9.5cmである。口縁部は突帯付近から外反する。口縁端部は面をなしておさめている。スカシは、底部上半と2段目に円形スカシを各段2孔ずつ千鳥状に配する。底部のスカシは、2段目のスカシに比して径が小さいことが特徴的である。外面は、一次調整としてタテハケを施した後、2段目・口縁部に回転ヨコハケ調整を加えている。内面は、下半に左傾ナメナデを、それ以上にはタテナデを加える。さらに、口縁部にはヨコハケ調整を施している。突帯は、断面が低平かつ幅広の台形を呈する。上下辺はヨコナデによって調整される一方、側辺にはヨコハケが加えられている。

2は3突帯4段構成品である。器高約48cm・口径約32.5cm・底径約28.7cmを測る。底部高は約14cm・突帯間隔は約11.5・15cm・口縁部高は約8.5cmである。口縁部は突帯付近から外反し、端部に面をなしておさめている。スカシは、底部上半と2段目に円形スカシを各段2孔ずつ千鳥状に配

する。底部のスカシは2段目のスカシに比して小径であることが特徴的である。外面は、一次調整としてタテハケを施した後、2段目・口縁部に回転ヨコハケ調整を加えている。3段目は、下半に回転ヨコハケ調整を、上半にタテハケ調整を加える。注目すべきは、下半の回転ヨコハケ調整を上半のタテハケ調整が切っている点である。内面は、2段目から3段目下半あたりまで左傾ナメハケ調整によって調整し、口縁部付近にはヨコハケ調整を加える。ここでも注目されるのは、3段目中ほどに同心円当て具痕跡が認められる点である。それ以上にはタテナデを加える。突帯は、断面が低平かつ幅広の台形を呈する。上下辺はヨコナデによる。一方、側辺にはヨコハケが加えられている。底部内面には、外傾する粘土紐接合痕跡が認められるほか、底端部は口縁部と同様にヨコナデによって仕上げられている。

以上のように、①底部付近に外傾接合痕跡が確認できること、②3段目付近の内外面に調整方式の変化が認められることから、本事例はいわゆる「倒立技法」(赤塚1991・小栗1992)によって製作されたと判断できる。つまり、本事例の製作工程を復元すると、回転台上で成形・調整を行い、いったん乾燥工程をはさんだ後に、天地を倒立させ、再び成形・調整を行ったと考えられるのである。底部内面に外傾接合痕跡が認められることから、この部分が本来倒立した状態で成形されていたことを示す。また、3段目付近の内外面に認められた調整方式の変化-3段目上半のタテハケが下半のヨコハケを切っていることは、3段目上半以上が倒立後に成形・調整されたことを示すものであり、この付近が倒立点であったことを示唆している。そうみると、3段目内面の同心円当て具についても、倒立点付近の接合を強化することを意図したと解釈できよう。

【朝顔形埴輪】現在整理中のため、今回は公表されている写真をトレースして示した(3)。実見したところ、3条4段構成品の存在が確認できた。外面は、一次調整としてタテハケを加えた後、回転ヨコハケによって二次調整を施している。

【馬形埴輪】現在整理中のため、今回は公表されている写真をトレースして示した(4)。それをもとに、実見結果を概述しておきたい。図示した4は、胴体後半部から胴体右側面にかけての破片である。これ以外に後脚2本がある。胴部外面には、刺突を加えた粘土紐によって尻繫が表現される。胴体右側面付近には障泥が表現され、その上に輪鏝の吊手を表現した粘土帯が貼付されている。尾は欠損する。

(7) 島川遺跡出土埴輪(図9)

遺跡(林1986) 島川遺跡は、愛知川右岸扇状地上、愛荘町大字島川に所在する中世城館址である。1983(昭和57)年度に、秦荘西小学校改修工事に伴う事前発掘調査が実施されたさいに、溝・ピット等から、中世期の遺物とともに

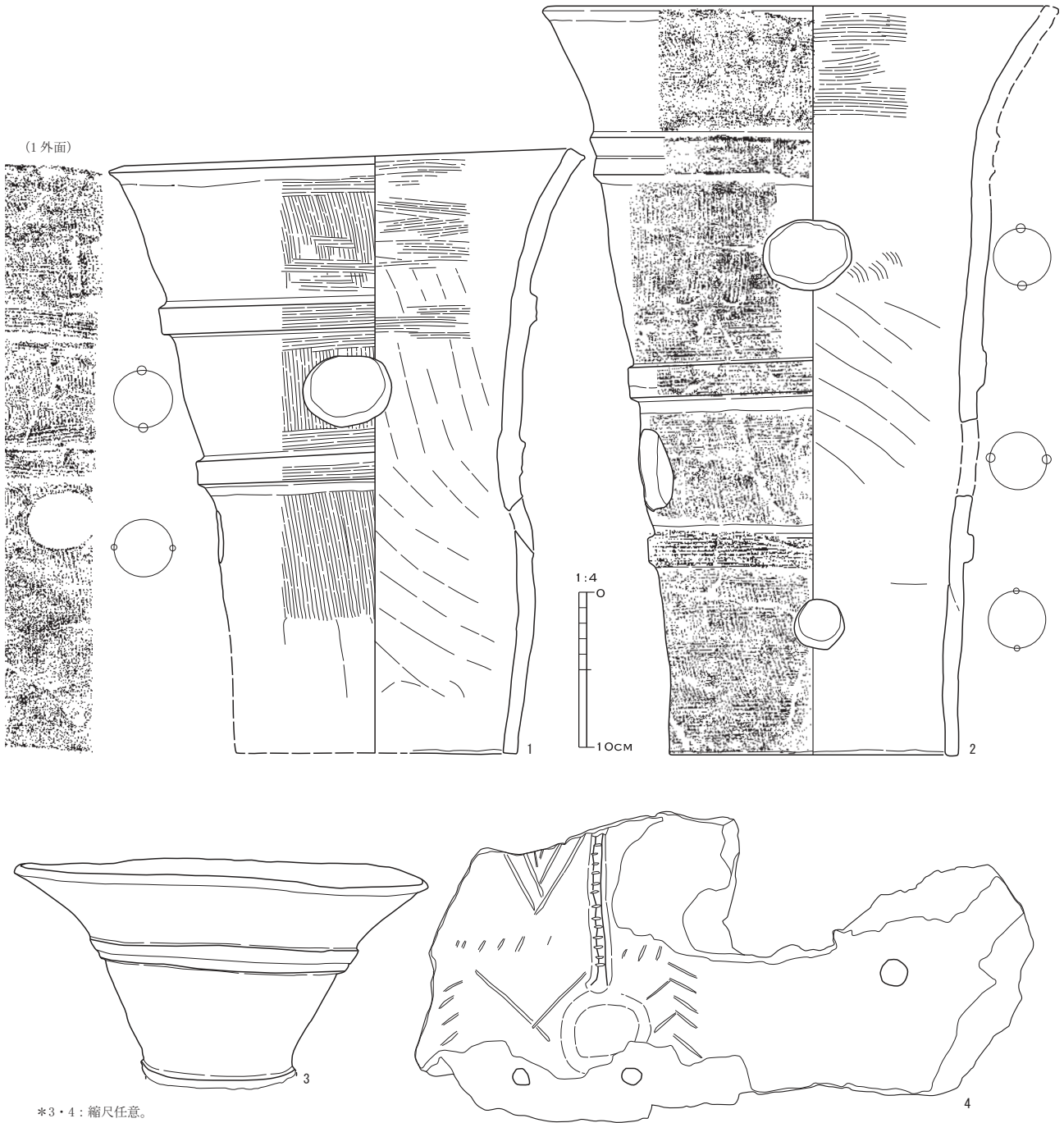


図8 湖東北部の埴輪（6：なまず1号墳）

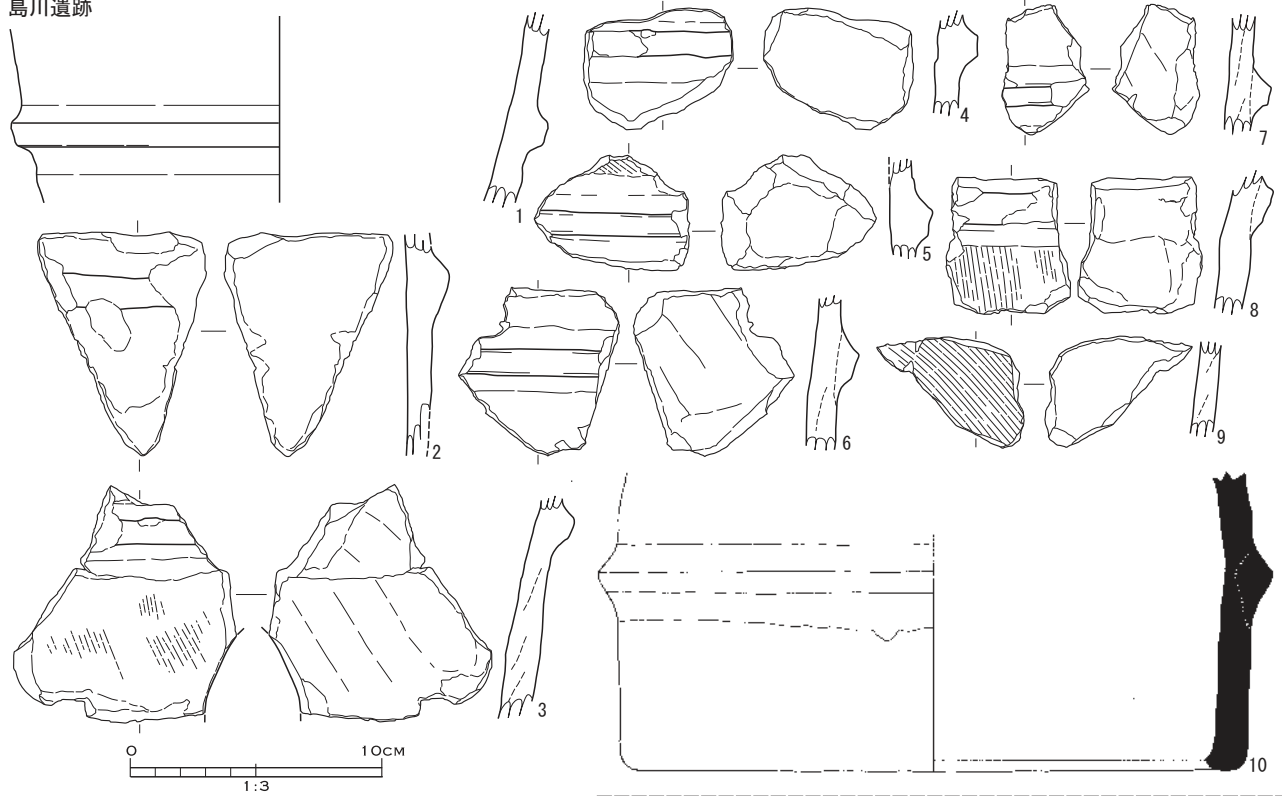
埴輪片が出土した。調査者は、これらの埴輪片を隣接する秦荘長塚古墳⁽²⁾からの二次的な流れ込みとして報告している。

埴輪 1983年度調査で出土した埴輪片については、一部の個体の実測図が報告されていたものの、大半の例については写真のみが提示されるにとどまっていた。そこで今回、愛荘町立歴史文化博物館のご厚意により資料調査を行い、実測図を作成することができたので、以下に報告する。

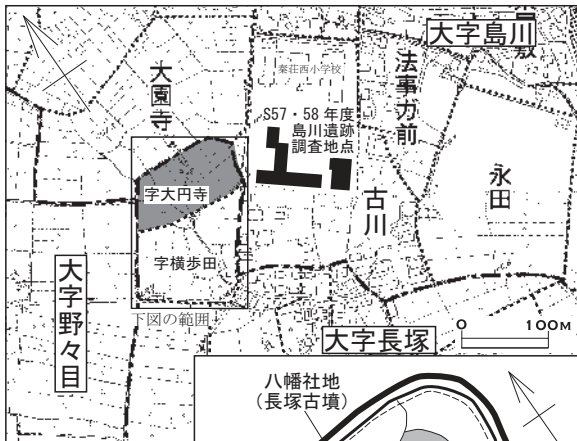
埴輪片はいずれも円筒埴輪である。今のところ、確実な

形象埴輪片は確認できない。1は突帯部片である。比較的大きな破片であり、突帯上端付近での外径（約20.4cm）を復元しえた。突帯は、断面形状が低平な台形を呈する。内外面ともに器面の遺存状態が不良のため、調整は不明である。2～8も突帯部片である。突帯の断面形状は台形を基調とする。やや低平で下端が低いもの（2・5・6・8）と、小ぶりで比較的突出度が高いもの（3・4・7）がある。器面の遺存状態が不良であるため、内外面調整を知りがたい例が多い。そのなかでも、3・5・8については、

島川遺跡

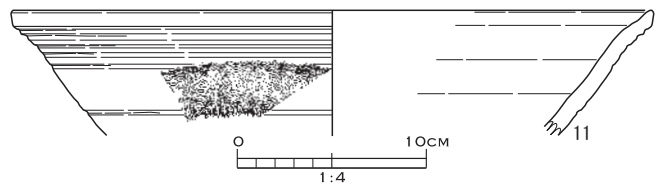
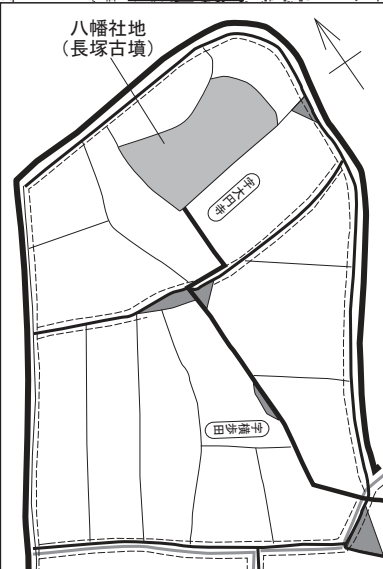


(参考) 秦荘長塚古墳

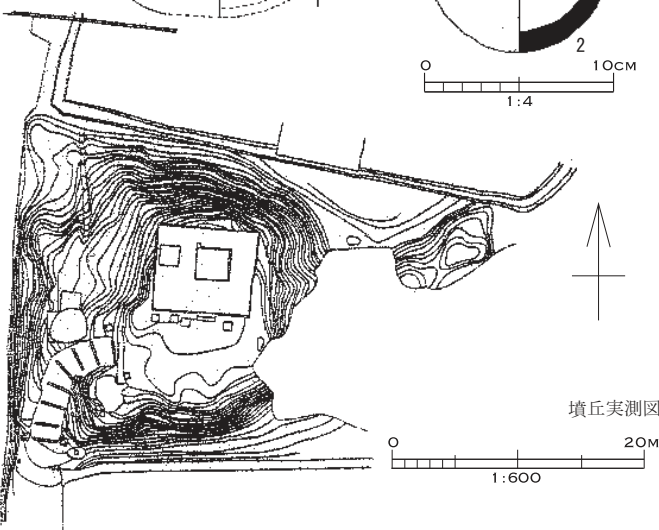
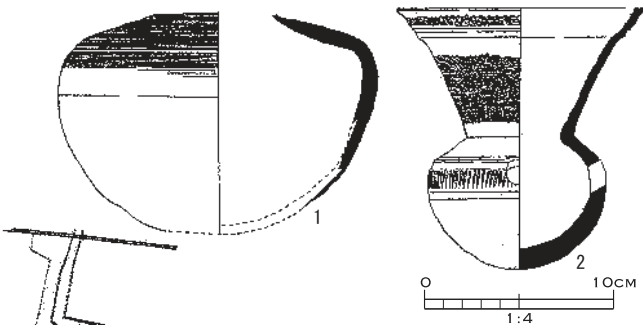


秦荘長塚古墳周辺の
大字・小字図

古墳周辺の地割
(明治6年頃)



伝秦荘長塚古墳出土須恵器 (1・2)



墳丘実測図

図9 湖東北部の埴輪 (7: 島川遺跡・秦荘長塚古墳)

外面に一次調整として左傾ナナメハケもしくはタテハケを施している。内面については、左傾ナナメナデが確認できる例（3・6～8）がある。スカシは、円形スカシの一部が確認できる（3）。9は体部片である。外面に明瞭な左傾ナナメハケを施す。これらいずれにも、遺存する範囲に明確な黒斑は確認できない。また、色調はバリエーションがあるものの、おおむね橙色～灰褐色を基調とする。印象から見て窯窯焼成品とみなすことができる。10は、報告書に実測図が提示されている円筒埴輪底部片である。今回は所在不明のため実見できなかった。底径約24cm・底部高約7.8cmを測る。突帯は低平な台形を呈する。板オサエ等の底部調整は施されないようである。

今のところ、これらの中に明確に時期を異にする例は認められないので、同一の帰属先を想定しても大過ないと考えられる。

須恵器 今回、資料調査を行うなかで、古墳時代の須恵器片1点（10）を確認したので、あわせて報告しておきたい。これは高杯形器台の口縁部片である。口径約34cmに復元できる。外面には凹線5条をめぐらす。4・5条目の間隔を広くあけ、その間に波状紋を加えている。堅緻に焼成されており、内面には降灰がみとめられる。

秦荘長塚古墳 本埴輪群の帰属先としては、調査者が想定したように、隣接する秦荘長塚古墳がまず候補となる。そこで、秦荘長塚古墳の様相を確認しておくことにしよう。

【郡誌類にみる秦荘長塚古墳】『近江愛知郡志 卷壺』（中川編1929、以下『郡志』）には、本古墳に関する記述がある。本古墳に関する基本史料なので、やや長くなるけれども、以下に引用しておきたい。

「八木荘村大字長塚は古墳より出でし大字名なり。氏神八幡神社鎮座ある所一見小山の如し、元と前方後圓瓢形の大古墳なりしを明治十四五年の頃北方の幾部を開墾せし時埴一個、提瓶一個、高杯臺部の破片一個とを出せり、今大字宮後八木神社に保管す。此古墳は尋常凡小の類にあらで西押立村勝堂の古墳若くは愛知川町石橋山塚将門塚と稱するものに比すべく優越なる古墳なり、土俗の傳説には伏隴長者の塚といふ」（中川編1929：p66）。

また、『滋賀縣史蹟名勝天然紀念物概要』（昭和11年版、以下『概要』）においても、以下のとおり、ほぼ同内容の記述がある。

「長塚古墳 同線（引用者註：近江鉄道線）愛知川驛より一、五軒 稻枝驛よりバスの便あり 同郡（引用者註：愛知郡）八木荘村長塚に在る。氏神八幡神社鎮座せる所と云ひ、小山の塚である。前方後圓の北方の一部が崩されてをり、明治十四五年頃それより祝部土器三箇出土」（滋賀縣史蹟名勝天然紀念物調査會1936：p108）。

【墳丘の復元】今、現地を訪れると径30m程度の不整円丘が残されている。『郡志』には「前方後圓瓢形の大古墳」、『概要』にも「前方後圓」という記述があるので、前方後

円墳と認識されていたことがわかる。ただし、いずれが前方部で、いずれが後円部なのかという点を決するにはいささか問題が残っている。『秦荘の歴史 第一巻』（以下『町史』）には、「明治十六年（一八八三年）三月、大字長塚宮世話若衆が八幡社東側の前方部を開墾した際に、土中より刀子や土器が出土した」（秦荘町史編集委員会編2005、p80）とする⁽³⁾。この記述からは、現在八幡社が設置されている不整円丘を後円部とし、その東側に前方部がとりつくという墳丘形態が想定されていることがわかる。ただし、『郡志』・『概要』のいずれにおいても、墳丘が前方後円形であるという記述はあるものの、前方部と後円部の向きに関する記述はない。『町史』には記述の根拠が示されていないので、墳丘削平に先立つ明治6年に作成された「長塚村地券取調総絵図」（図9、以下「絵図」）によって示された古墳周辺の地割から、古墳の向きを検討する。

「絵図」によると、古墳は東西方向に長い地割として表現されている。注目されるのは、①北側の中央部付近がくびれ部状を呈すること、②東辺が円弧を描くものに対して、西辺は直線的であること、の二点である。これらの表現からは、東側に後円部、西側に前方部を想定するのが妥当であろう。そうなると、現在遺存する西側の残丘は前方部であり、明治期に削平されたのは後円部であった可能性が高い。さらに、地割からみて、墳丘規模は全長40m程度に復元できる。加えて、墳丘を一定幅の水田が取り巻いており、これらが周濠に相当する可能性もある。

【伝秦荘長塚古墳出土須恵器】一方、『町史』には、明治の開墾時に出土した土器のうち、八木神社に伝わる須恵器2点の実測図（1・2）が示されている。古墳の所属時期を推定する手がかりとなるので、これら須恵器についても、『町史』に掲載された実測図に基づいて概説しておきたい。

1は壺類の体部片である。頸部以上を欠失している。肩部の張った体部に丸底が続く。肩部上半にはカキメを施している。2は甗である。やや小ぶりの体部に大きく外反する口縁部が付される。口縁部は、上端と中央付近に波状紋を加える。体部は凹線によって区画した間に刺突列点紋を施している。2については、MT15もしくはTK10型式に併行すると思われ、埴輪とも時期的な齟齬はない。

埴輪の帰属先 鳥川遺跡から出土した埴輪と須恵器については、『郡志』等の戦前の記録に埴輪類の出土が伝えられていないことがいささか気になるけれども、報告者の想定するように、隣接する秦荘長塚古墳に帰属するとみておくのが、今のところ穏当であろう。

（8）香之庄狐塚古墳出土埴輪（図10）

古墳 香之庄狐塚古墳⁽⁴⁾は、愛知川右岸扇状地上、愛知郡愛荘町大字香之庄に所在した古墳である。過去に削平を受けたため、現在はその姿をとどめていない。よってここ

では、秦荘長塚古墳の場合と同様に、戦前の記録類に基づき、その様相を確認しておきたい。

まず、『近江愛知郡志 卷壺』（中川編1929）には、以下のように発見の経緯と当時の様相が記述されている。遺跡の状況を検討する基本史料であるので、やや長くなるけれども、以下に引用しておきたい。

「大字香之庄小字中道の稲田中に方数間の高地あり、今畑地となる、此地は古來狐塚と稱し堆土ある荒蕪地なりしが明治二十九年所有者によりて開墾せられ畑と化したり。狐塚の名は其畑地と西隣と北隣の稲田のみの名なり。熱心なる同大字の區長や調査委員は狐塚の名は古墳墓の荒れし以後の名なりと前回編者が説きしに留意し其畑地の土を掘り回せしに土中より埴輪圓筒の破片二三片と埴馬又は土偶の足らしきもの一個と祭器の陶片数種とを拾得したり。報に接し昭和二年九月五日行て實地を踏査し且つ土地所有者に二十九年開墾當時の状況を聞くに當時荒蕪地の面積は今の畑より東へ六七尺北へ一丈計りもあり、西端には高さ六七尺の堆土ありたれば之を開墾せしに土中より種々の陶片多く出づれば恰も當時改修中の縣道上に之を運び捨てたりと、其日里人は更にその畑地を掘り返せしに數多の埴輪破片の外古墳底部に布かれし小さき丸石は落々として土中に在り、又小さき朱塊も混入するを見たり」（中川編1929：p65）。

さらに、『滋賀縣史蹟名勝天然紀念物概要』（昭和11年版）においても、以下のとおり、ほぼ同内容の記述がある。

「狐塚古墳 同線（引用者註：近江鉄道線）愛知川驛より三、五軒 稻枝驛よりバスの便あり 同村（引用者註：八木莊村）大字香之庄小字中道の稲田中にある。明治廿九年開拓せられ今は畑地となる。方数間の高地であるが、隣接して荒蕪地がある。昭和二年の頃埴輪圓筒の破片数十片、土器片等を出土。古式のものであろうか」（滋賀縣史蹟名勝天然紀念物調査會1936：p108）。

以上の記述から読み取りうることを箇条書きでまとめておこう。

①大字香之庄小字中道の水田中に狐塚と称する微高地があり、荒蕪地となっていた。この微高地は、現在（昭和2年段階）「方数間」であるが、もともとは「今の畑より東へ六七尺（引用者註：約1.8～2.1m）北へ一丈（同：約3m）計りもあり、西端には高さ六七尺（同：約1.8～2.1m）の堆土」があった。

②明治29年に土地所有者によって開墾され畑地となった。そのさいに「種々の陶片」が出土し、改修中の県道敷に遺棄した。

③開墾時には、多くの埴輪片のほかに、「古墳底部に布かれし小さき丸石は落々として土中に在り、又小さき朱塊も混入する」状況が見られた。

現在、大字香之庄小字中道の水田中には、一辺5m程度の畑地となっている高まりが遺存している。この高まりは、

明治6年に作成された可能性が高い「香之庄村地券取調絵図」（図10）においても水田中の畑地として記載されており、先述した『郡志』類に記載された「方数間の高地」に相当するとみて大過ない。おそらく古墳は、この畑地付近に存在したと考えられる。ただし、地割からは、墳形・規模に関する情報を得ることはできなかった。

なお、上記の③に関して加えると、「古墳底部に布かれし小さき丸石」については、「小さき朱塊」が混じることからみて、墓壙底面もしくは石室床面の礫敷とみておくのが穏当であろう。

埴輪 『愛知郡志 卷壺』には、香之庄狐塚古墳から採集された埴輪の写真が掲載されている（図10）。現物の所在が不明なので、長らくこの写真が埴輪の様相を知る唯一の手掛かりであった。しかし、近年、花田勝広氏によって、水田中の畑地付近において埴輪片1点が採集された。ここでは、『郡志』所載の写真から読み取りうる限りの情報を提示するとともに、あわせて花田氏採集資料も実測図を提示し、報告することにした⁽⁵⁾。

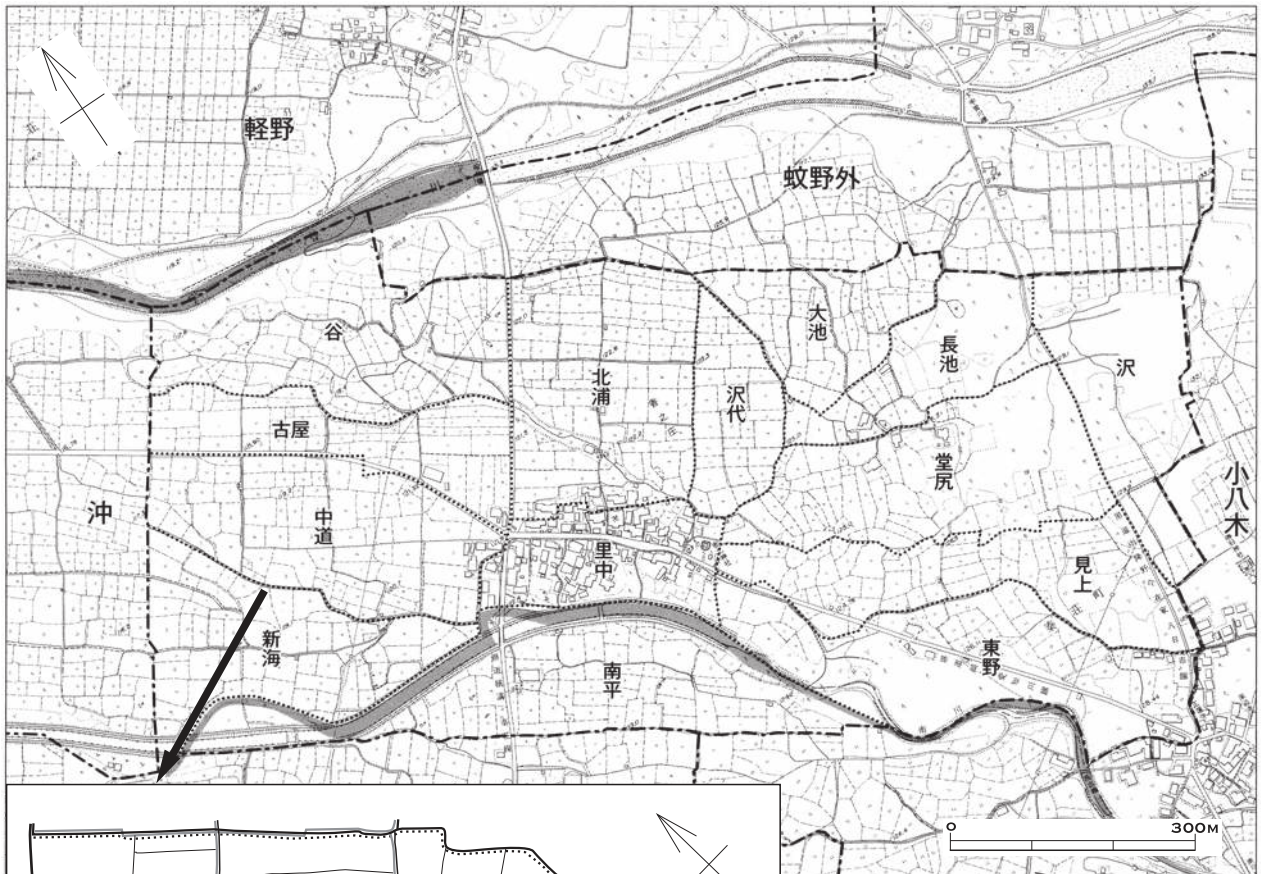
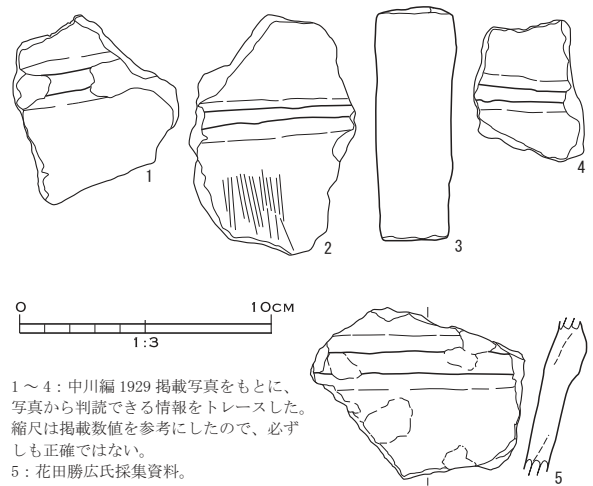
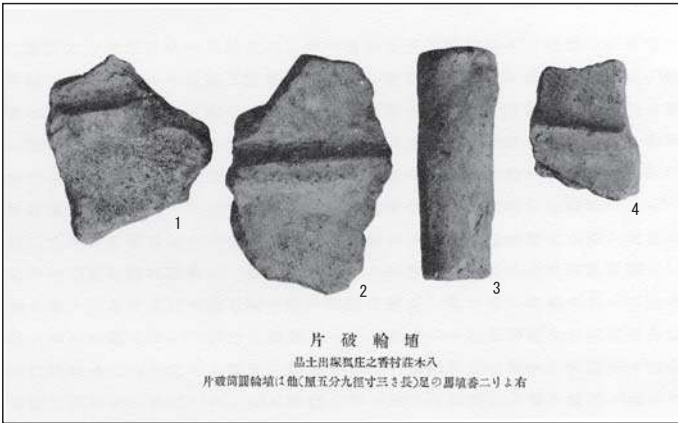
【『郡志』所載資料】「埴輪破片」として4点が提示されている。そのうちの3点（1・3・4）は、円筒埴輪の突帯部片である。いずれも10cm以下の小片である。突帯の断面形状は、上下に稜がみとめられることから、台形もしくはM字形であろう。外面調整を確認できる3では、やや左傾気味のタテハケ調整を施しており、明確な二次調整はみとめられない。写真では、器面に顕著な濃淡がみとめられず、黒斑はないようである。2は円筒状の破片である。報告者は「埴馬又は土偶の足らしきもの」とする。ただし、記載された法量－長さ3寸（9.09cm）・径9分5厘（2.87cm）－からみて、馬形埴輪あるいは人物埴輪の脚部とするには小さすぎよう。写真からは中実か中空か判断できないので、確言はできないけれども、もし中実であるとすれば、法量からみて家形埴輪の堅角木等が候補となる。

【花田氏採集資料】上述した水田中にある高まり（畑地）の北側付近で採集された円筒埴輪の突帯部片（5）である。わずか一片とはいへ、現在のところ実見しうる唯一の埴輪資料である。内外面ともに器面の遺存状態が不良であるため、器面調整についてはまったく知りえない。突帯の断面形状は低平な台形を呈する。遺存部分に黒斑は確認できない。色調は、内面がにぶい橙色（7.5Y7/3）、外面がにぶい橙色（7.5Y R7/3～7/4）、断面が灰白色（2/5Y8/2）である。確言しがたいものの、窯窯焼成品であると思われる。

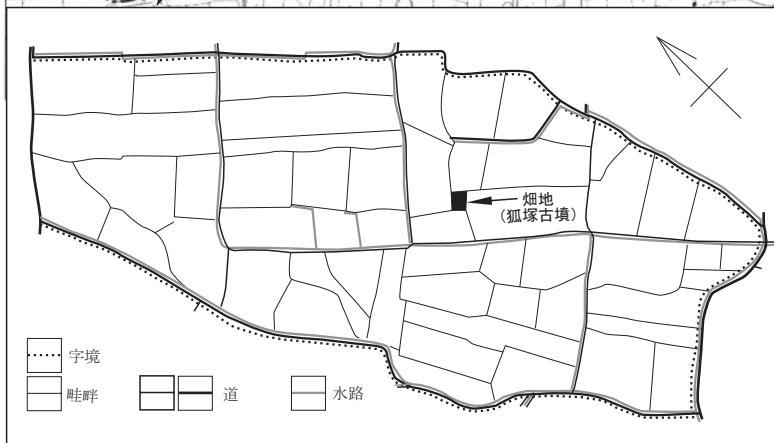
（9）八坂東遺跡出土埴輪（図11）

遺跡 八坂東遺跡は犬上川左岸河口部、滋賀県立大学敷地一帯に広がる複合遺跡である。1993（平成5）年に（仮）滋賀県立大学整備事業に伴って、2002・2003（平成14・15）年に滋賀県立大学人間看護学部整備事業に伴って、それぞれ発掘調査が実施された（北村1995・重田2006）。その結果、

香之庄狐塚古墳



香之庄狐塚古墳の位置
(大字香之庄小字図)



字中道の地割と
香之庄狐塚古墳推定地

図10 湖東北部の埴輪（8：香之庄狐塚古墳）

中世前期頃を主体する多数の遺構が検出された。これらの遺構等から、中世期の遺物に混じって、埴輪片が出土している。

埴輪 両次の調査で出土した埴輪については、すでに報告書が刊行されている。ただし、図示された埴輪の実測図は、天地・左右の認識や器種認定等の点に問題を残しているため、今回再実測を行った。出土埴輪には、円筒埴輪・形象埴輪（盾・蓋）がある。なお、1～7は2002・2003年度調査、8・9は1993年度調査での出土品である。

【円筒埴輪】 1・2は溝B II 591から出土した。いずれも円筒埴輪突帯部片である。報告書では、低位置突帯状の底部片として復元している。しかし、底部とみたのはスカシ部分であり、下方には体部が続くとみるべきである。1の外面にはヨコハケが施され、内面はナデによって調整する。2は、天地逆に報告されていた。断面台形を呈する突帯で、外面に右傾ナメハケを施す。内面はタテ方向のナデ調整による。3・4はピットB II 59から出土した。3は円筒埴輪底部片である。外面は、大半を左傾ナメナデによって調整し、一部に二次調整としてヨコハケが確認できる。4も円筒埴輪底部片と思われる破片である。器面の磨耗のため詳細は判然としないものの、内外面ともに左傾ナメナデによって調整しているようである。8は、D 2 トレンチの落ち込み状遺構D 217から出土した。円筒埴輪突帯部片である。外面にはナメハケ調整を施し、赤色顔料が遺存する。

【形象埴輪】 5は、3・4と同じくピットB II 59から出土した。不整円形とも思われるスカシの一部を残す体部片である。外面はタテ方向のナデによって調整するとともに、上端部をヨコナデ調整する。内面には、粘土紐接合痕跡を顕著に残す。報告書では、ほぼ直立した状態で図示してあるけれども、粘土紐接合痕跡を目安として傾きを推定すると、図示するように内傾気味になり、円筒埴輪とは考えがたい。ここでは器種不明品としておく。6は溝A I 1から出土した埴輪片である。円筒埴輪として報告されているものの、外面には横走る綾杉紋が施されていることから、盾形埴輪等の形象埴輪片であると考えられる。7はA 1 遺物包含層から出土した埴輪片である。「土師質土器 埴輪？」と報告されている。しかし、円筒部外面に板状部を貼付し、その外面に鋸歯紋が施されていることからみて、盾形埴輪片である可能性が高い。9はD 2 トレンチ排土表採資料で、蓋形埴輪の笠部片である。

以上の円筒埴輪・形象埴輪片については、少なくとも残存した部分に、明確な黒斑が確認できない。とくに、円筒埴輪（1）の断面・内面は灰色（7.5Y6/1）を呈しており、窖窯焼成品とみて大過ないものである。その他の破片についても、断面の芯の部分のみが暗灰色を呈するものの、内外面は淡黄褐色を基調としており、窖窯焼成品とみて違和感はない。

複数の埴輪樹立墳の想定 1993年度調査地と2002・2003年度調査地はかなり距離を隔たっている。さらに、後者の場合、埴輪片の出土は大きくA地区とB地区に分かれている。両者の埴輪片を胎土の点からみると、A地区出土の盾形埴輪片はいずれも0.5mm以下の砂粒を非常に多く含んでいるのに対して、B地区出土埴輪片は砂粒の包含が少ないことから、現時点では、両者がそれぞれ別の古墳に由来すると考えておくのが穏当であろう。加えて、1993年度調査の出土例も考慮すると、遺跡周辺には、複数の古墳が存在したことを想定できる。

（10）段ノ東遺跡S X 03・04出土埴輪（図11）

遺跡（堀2000） 犬上川左岸扇状地末端部付近に位置する。古墳時代～平安時代頃の遺物散布として周知されていた。新生産調整推進排水対策事業に伴って発掘調査が実施された結果、古墳4基をはじめ、奈良時代以降の掘立柱建物等が検出された。古墳は、いずれも墳丘が削平されており、周濠のみが検出された。4基の古墳の内容は、S X 01（円：径約18m）・S X 02（円：径約16m）・S X 03（方：一辺約7m）・S X 04（方：一辺約7m）である。これらのうち、S X 03・04から埴輪が出土したほか、S X 01周辺の溝からも埴輪片が出土している。

埴輪 出土埴輪は細片であり、数量も乏しい。以下においては、出土遺構ごとに記述を進める。

S X 03からは、家形埴輪片1点（1）が出土している。屋根部と軸部との接合部付近の破片である。

一方、S X 04からは、家形埴輪裾部片1点（3）が出土した。報告書では、円筒埴輪突帯片とされていた。しかし、実見したところ、突帯の一端がカーブを描いており、コーナー部分に相当することから、家形埴輪の裾部片と判断した。突帯の断面形状は台形を呈する。

これら以外にS X 01周辺からも、円筒埴輪突帯部片1点（11）が出土している。

以上の埴輪片は、いずれも細片であり、器面の磨耗が著しいため、詳細を知りたいのが現状である。ただ、遺存部分に明確な黒斑は確認できず、断面の芯部まで明褐色に焼成されている点を考え合わせると、窖窯焼成品の可能性が高い。

埴輪の帰属 埴輪片の帰属先は、まず検出された古墳群が想定できよう。出土須恵器に基づくと、S X 01は6世紀中頃、S X 02は6世紀後半頃に所属時期を想定できる。一方、埴輪が出土したS X 03・04については、埴輪以外に出土遺物がなく、所属時期を確定しがたい。ただし、S X 03は6世紀後半頃に溝に切られていることから、少なくともそれ以前に遡上する。このことに加え、先述したとおりS X 03・04出土埴輪に窖窯焼成品の可能性を考慮すると、これらの埴輪片の帰属先としてS X 03・04を想定する余地がある。しかし一方で、出土量があまりに少ない

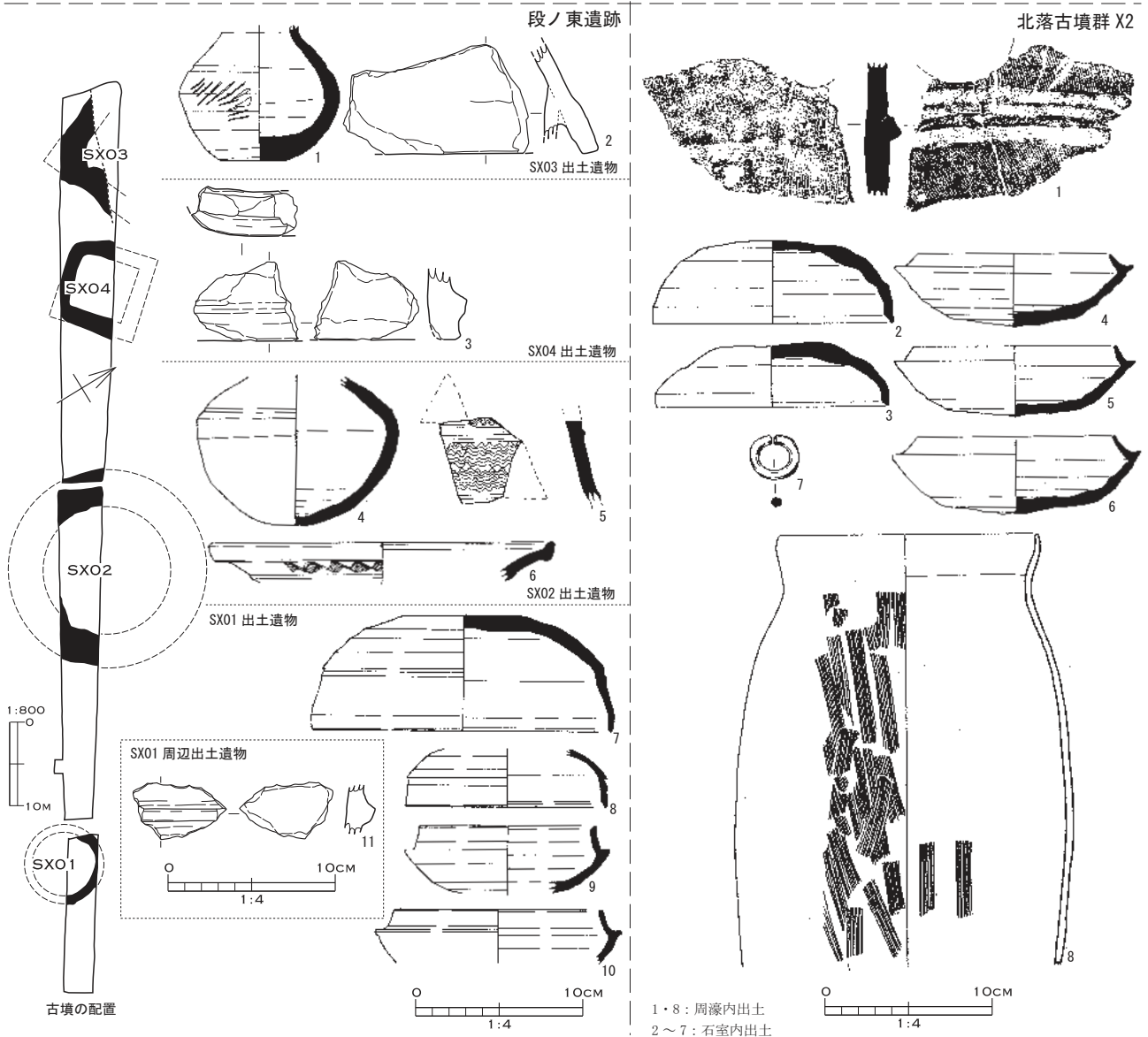
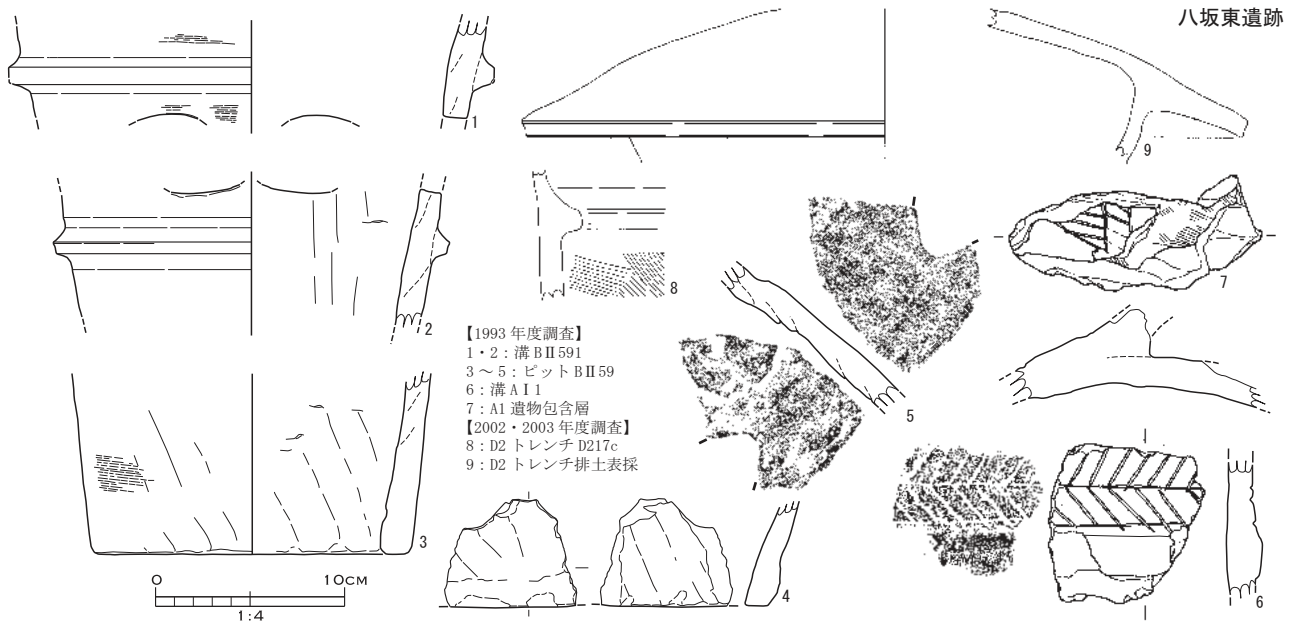


図11 湖東北部の埴輪 (9: 八坂東遺跡・北落古墳群・段ノ東遺跡)

ことから、これらの埴輪片がS X03・04に樹立されていたと断定するにはやや不安を覚える。近隣には、内容は不明ながらも、径約30mの円墳である神ノ木古墳が存在していること、調査地周辺に古墳群が広がる可能性があること等の点から、神ノ木古墳やその周辺に存在した別の埴輪樹立古墳から混入した可能性も否定できないからである。現状では、いずれかを決めることは難しい。よって、ここでは埴輪片の帰属先として、①S X03・04、②周辺に存在した別の古墳（群）の二案を提示するにとどめ、結論は今後の調査の進展に委ねたい。

(11) 北落古墳群 X 2 周濠出土埴輪（図11）

古墳群 北落古墳群は、犬上川左岸扇状地上に展開する後期群集墳の一つである（用田1992）。現在40数基が確認されている。大半が墳丘を削平された埋没古墳であるため、今後基数が増加する可能性は高い。県営かんがい排水路事業に伴う発掘調査で検出された横穴式石室墳 X 2 周濠内から、円筒埴輪片2点が出土した。調査トレンチが狭小であり、周濠の一部を検出したにとどまる。

埴輪 報告書には、出土した埴輪片2点のうち、遺存状態が良好であった1点（1）が図示されている。円筒埴輪体部の突帯付近の破片である。突帯は断面台形を呈する。外面には左傾ナメハケを施す。二次調整はみとめられない。内面はナデ・ハケ調整による。突帯上段には円形スカシの一部が残る。無黒斑土師質焼成品である。

その他の遺物 石室内および周濠内からは、埴輪以外に須恵器（2～6）・土師器長胴甕（8）・耳環（7）が出土している。出土須恵器はTK43型式に並行するものである。

(12) 竹ヶ鼻廃寺（4次調査）SD13出土埴輪（図12）

遺跡（林2010） 竹ヶ鼻廃寺は、犬上川右岸下流域、彦根市竹ヶ鼻町に所在する遺跡である。その性格として、古代寺院・地方官衙が推定されている。埴輪が出土した遺構は、緩やかな円弧を描きつつ東西に伸びる溝で、幅1.4m・深さ0.4mを測る。7世紀頃の須恵器類とともに、円筒埴輪片が出土した。調査者は、竹ヶ鼻廃寺造営に伴い埋められた可能性を指摘する。

埴輪 円筒埴輪突帯部片（1～3）と同底部片（4）がある。外面調整は一次調整タテハケのみである。内面はナデによって調整される。体部片には円形スカシの一部が確認される（1）。突帯は断面台形を呈する。焼成は土師質で、遺存部分に黒斑は確認されず、窖窯焼成品の可能性が高い。外面に赤色顔料を残すものがある。

(13) 大堀山古墳群採集埴輪（図12）

古墳群 大堀山は、芹川の北岸にある標高155m程度の独立丘陵である。丘陵稜線上において、少なくとも5基の古墳の存在が確認できる（辻川2007B）。いずれも直径20～10

m程度の円墳である。滋賀県埋蔵文化財センターには、「大堀山」採集とされる埴輪片がある。採集地点の詳細を知りえないため、埴輪がいずれの古墳に伴うのか確言できないものの、この大堀山丘陵で採集されたとみてはば間違いない。

埴輪 採集埴輪は整理用コンテナ約0.5箱弱程度である。円筒埴輪が主体で、形象埴輪と思われる破片が若干ある。

【円筒埴輪】 確実な朝顔形埴輪は確認できない。胎土はいずれも緻密で、焼成は大半が外面に黒斑を欠く無黒斑土師質焼成が多い。一部に灰色を呈する須恵質焼成品もみとめられた。前者には、軟質のものと、比較的緻密に焼成されたものの二手がある。

最も大きな破片である11に基づく、復原しえた各部の寸法は、底部約16.4cm・体部径（第1段突帯下）約20cm程度・底部高約12.5cmである。11は、底部外面下半に底部調整の板オサエ痕跡を残す。9・10も底部片である。外面にはタテハケ調整の後に底部調整の板オサエ痕跡が残る。

突帯はいずれも低平な断面台形である（3～6）。貼り付けはナデによる。断続ナデ技法はみとめられなかった。外面調整はタテハケ調整を基調としており、確実な二次調整は確認できない。ハケ密度は9～10本/cm程度であり、比較的細密な印象を受ける。内面はナデ調整を基調とする。

口縁部片は1点のみ確認できた。1は普通円筒埴輪の口縁部片と思われる。端部外面付近に幅2.5cm程度の粘土帯を貼り付けたいわゆる「貼付突帯口縁」である。粘土帯には、指頭による凹みが接続して残っている。内面にヨコハケ調整が認められる。

スカシは、全形を知りうる例はないものの、円弧の一部が残る例（3・7）があり、円形スカシであることが分かる。

【形象埴輪】 器種を判別しえない不明形象埴輪片が2点ある。12は板状品で、二辺が剥離面をなす。外面の片面には赤色顔料が一部遺存している。家形埴輪の軸部に相当する可能性がある。これ以外に円筒に粘土板を貼付した個体がある。いずれも胎土・焼成ともに円筒埴輪と同一である。

(14) 木曾遺跡3T出土埴輪（図12）

遺跡（北村1996） 木曾遺跡は、芹川中流域右岸に位置する。縄文時代以降中世にいたる複合遺跡である。調査地点では、古墳は確認されていない。ほ場整備事業に伴って発掘調査が実施された結果、ピット（3TSP0302）から、朝顔形埴輪片1点が出土した。埴輪片以外に出土遺物はない。また、平面不整形の土坑（3TSK0301）から、8世紀頃の須恵器杯身とともに、普通円筒埴輪片1点が出土している。

埴輪 1は普通円筒埴輪の口縁部片である。内外面ともに左傾ナメハケ（8本/cm）を施し、口縁部はヨコナデによって調整する。内面には粘土紐接合痕を残す。残存部に



図12 湖東北部の埴輪（10：大堀山古墳群・木曾遺跡・竹ヶ鼻廃寺）

黒斑は確認できない。色調は、にぶい橙色（7.5Y R7/4）である。

2は、朝顔形埴輪肩部付近に相当すると思われる破片である。外面は、器面の遺存状態が不良のため、調整の詳細をしりえない。内面は、タテハケ（5～6本/cm）を施す。黒斑は確認できない。色調は橙色（5 Y R6/6）である。

3. 埴輪の変遷過程

(1) 円筒埴輪の変遷案

前章において、当該地域の出土埴輪例を概観した。事例

数が増加したとはいえ、質量ともに乏しい事例が多く、詳細な検討は困難である。そうした資料的制約を認識しつつも、ここでは従来の円筒埴輪編年研究の成果を参考にして、変遷案を提示することにした。なお、円筒埴輪を欠く事例については、次章において個別に時期を想定する。

(2) 群の設定その内容（図13・14、表2）

グループ（群）の設定 円筒埴輪の属性を形態的属性と技術的属性に大別し、それぞれの組み合わせから、以下の四つのグループに分けた。対象とした属性とその組み合わせ

表2 円筒埴輪の属性と組み合わせ

群	番号	遺跡名	形態的属性										技術的属性																							
			口縁部				スカシ				突帯		内外面調整					突帯		底部調整		焼成														
			断面形状 (図13)				形状				断面形状 (図14)		外面					内面		突帯間隔 設定手法		倒立 技法		無黒斑												
			1類	2類	3類	4類	個 数 / 段	方 形	三 角 形	半 円 形	円 形	1類	2類	3類	一次					ナ デ	ハ ケ	同心 円当 て具	有指標		板 オサ エ	有 黒 斑	土 師 質	須 恵 質								
															タ テ ハ ケ	ナ メ ハ ケ	ナ デ	ヨ コ ハ ケ	B 種 ヨ コ ハ ケ				省 略	回 転 ヨ コ ハ ケ					A 手 法	B 手 法	無 指 標	無 黒 斑				
1群	2	荒神山古墳		○										○	○	○	○	○	○	○													○			
2群	4	沖の矢古墳			○	○																											○	○		
	9 c/d	八坂東遺跡(B区)																															○	○		
3群	1	ゲホウ山古墳				○																												○	○	
	5	塚乞手古墳	4-5			○																												○	○	
	7	島川遺跡																																	○	
	8	香之庄狐塚古墳																																	○	
	11	北落古墳群X2周濠																																	○	
	12	竹ヶ鼻廃寺4次SD13																																	○	
	13	大堀山古墳群																																	○	
4群	6	なまず1号墳	2-3																																○	○
			3-4		○																														○	○

【凡例】*1 段構成は、○条突帯●段構成を○-●と表記する。

*2 突帯間隔設定技法は辻川2003Cによる。

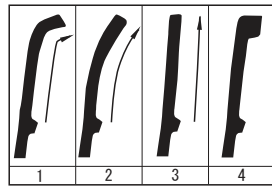


図13 口縁部断面形態分類模式図

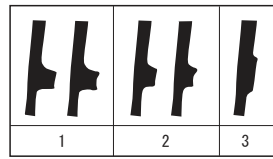


図14 突帯断面形態分類模式図

については図表（図13・14、表2）に譲り、以下、四つのグループ（1～4群）の内容について概説しておきたい。

【1群】口縁部は1類、段間に2孔のスカシを配する。スカシ形状は方・三角・半円形である。突帯は1類突帯を基調とし、突帯間隔設定技法としてA・B手法を用いる。外面調整は一次タテハケ調整のみ・一次タテハケ調整+二次ヨコハケ調整による。内面調整はナデ・ハケを基調とする。有黒斑焼成品である。具体例として、荒神山古墳例をあげることができる。

【2群】口縁部は2・3類、段間に2孔のスカシを配する。スカシ形状は円形である。突帯は2類突帯を基本とする。外面調整は、一次タテハケ調整のみ・一次タテハケ調整+二次（B種）ヨコハケ調整による。内面調整はナデ・ハケを基調とする。無黒斑焼成品である。具体例として、沖の矢古墳・八坂東遺跡B地区をあげることができる。

【3群】口縁部は3類が多く、まれに4類がある。段間に2孔スカシを配する。スカシ形状は円形である。突帯は2類突帯を基調とする。突帯間隔のばらつきが大きいことから、突帯間隔設定手法は無指標方式と思われる。外面調整は一次タテハケ調整のみで、二次調整を省略する。内面調

性はナデを基調とする。板オサエによる底部調整を施す例がある。無黒斑焼成品である。具体例として、ゲホウ山古墳・塚乞手古墳・島川遺跡・香之庄狐塚古墳・北落古墳群X2・竹ヶ鼻廃寺4次SD13・大堀山古墳群・木曾遺跡をあげることができる。

【4群】現時点では、なまず1号墳例のみが該当する。口縁部は3類、段間に2孔のスカシを配する。突帯は4類突帯である。外面調整は一次タテハケ調整+二次回転ヨコハケ調整による。内面調整はナデによる。また、内面には同心円当具痕を残す。倒立技法を採用するものがある。無黒斑焼成品である。

（3）各群の位置づけ

各群の年代 次に、共通編年（埴輪検討会2003A・B）を参考にしつつ、共伴する可能性のある須恵器類も考慮しながら、各群の存続年代を推量する。

【1群】これらの中で1群が先行することは、1群のみが有黒斑品であることから明らかである。諸特徴を考慮して、共通編年Ⅱ期～Ⅲ-1期に並行すると考える。

【2群】無黒斑焼成であることから、窖窯導入以降—共通編年Ⅳ期以降と考えられる。ただ、共伴する可能性のある須恵器をみると、B c種ヨコハケとともにB d種ヨコハケがみとめられる沖の矢古墳ではTK23・47型式並行の須恵器杯蓋が出土しており、共通編年Ⅴ-1期まで下降する可能性が高い。当該地域では、二次調整としてのB種ヨコハケが後期初頭段階まで残存したと考えられるのである。

【3群】ゲホウ山古墳でMT15・TK10型式併行の須恵器

杯身が出土していること、さらに、北落古墳群X2出土埴輪が、TK43型式併行の須恵器を副葬した当該古墳に伴う可能性があることを考慮して、V-2～3期に位置づけられる。ただし、須恵器を伴わない事例については、V-1期に遡上することも十分考えるので、結果としてほぼV期をとおして継続した可能性を想定しておきたい。

以上の1～3群は、おおむね1群→2群→3群という変化を遂げる。この変化は、近畿中央部の埴輪の変遷方向（川西1988）とほぼ同じといってよい。近畿中央部の技術系統の影響下に成立した埴輪群といえる。

【4群】一方、4群は、回転ヨコハケを用いることや、倒立技法の採用がみとめられる等の点で、須恵器技法との関連が強い「須恵器系埴輪」の一種とみることができる。つまり、1～3群のような近畿中央部の通常の埴輪とは異なる系統である。それゆえ、4群が無黒斑焼成品であることから、2・3群に並行もしくは後出するといえるものの、それ以上は単純に決しえない。結論から述べると、近江地域における須恵器系埴輪の展開が主に古墳時代後期前葉を中心とする時期であることから（辻川2006C）、ここではV-1・2期に位置づけておきたい。

4. 埴輪の展開と古墳の動向をめぐる諸課題

前章までの検討結果を踏まえて、本章では、時期ごとに埴輪の展開様相を概観するとともに、古墳の動向に関して派生するいくつかの課題を提起しておきたい。

（1）前期後半～中期前半

荒神山古墳の埴輪 湖東北部地域において、埴輪が導入されたことを明確にしりうるのは、今のところ荒神山古墳を端緒とする。埴輪は1群としたものであり、時期については、その特徴から共通編年Ⅱ-2～Ⅲ-1期に併行すると考える。

【埴輪配置】琵琶湖周辺地域では、当該期およびそれに先行する段階の埴輪樹立古墳例として、大津市壺笠山古墳・長浜市若宮山古墳・大津市膳所茶臼山古墳・草津市北谷11号墳等がある（辻川2003B）。いずれも断片的に埴輪が採集されたり、出土したりしている事例であって、その具体的な配置・配列状況までは知りがたい。それにたいして、荒神山古墳では、確実に墳丘テラス面において円筒埴輪列が検出されており、墳丘を圍繞する配列方式が確実に導入されたことを知りうる事例となった。また、荒神山古墳の埴輪には、以下のとおり注目すべき点がいくつかある。

【罌付壺形埴輪】一つは、罌付壺形埴輪の存在である。罌付壺形埴輪は、前期中頃（Ⅱ-1期）に出現し、中期後半頃（Ⅳ期）まで継続する器種である。管見では、現時点で37遺跡からの出土を確認している。出土地は、大阪府11例・奈良県11例・京都府6例・兵庫県4例・三重県2例・滋賀県1例・群馬県1例・宮崎県1例であり、近畿中央部

に分布が偏る傾向を示す。奈良県上の山古墳（木下他1996）・大阪府萱振1号墳（廣瀬他1992）例が最も古いことから、近畿中央部において壺形埴輪から派生したと考えられる（吉田1999）。その後、中期初頭から中期前葉（Ⅲ-1・2期）にかけて盛行する。荒神山古墳での採用は、当該期の最新の埴輪組成を受容したものであろう。

【罌付円筒埴輪の欠如】一方、当該期の近畿中央部地域では罌付円筒埴輪が盛行しているにもかかわらず、琵琶湖周辺地域における前期の埴輪例の中に罌付円筒埴輪がみとめられないことを高橋克壽氏がはやくに指摘していた（高橋1992）。荒神山古墳の調査では、罌付円筒埴輪の有無に注目していたけれども、現時点で確認できていない。

【埴輪組成の問題】このように、罌付壺形埴輪という最新情報を受けつつも、罌付円筒埴輪を欠くというややアンバランスな埴輪組成が生じた背景については、現時点で十分に解釈していないものの、近畿中央部と、当該地域を含めた琵琶湖周辺地域との関係性の一面を反映しているとみて大過なからう。この点は今後の課題としたい。

荒神山古墳前後の首長墓 荒神山古墳に先行する、あるいは後出する首長墓は、少なくとも湖東北部地域のなかでは明瞭とはいいがたかった。つまり、荒神山古墳は突如として出現し、後続する首長墓をもたない孤立した存在であるようにもみえるのである。それゆえ、荒神山古墳の被葬者たる首長は、湖東北部地域にとどまるのではなく、より広域を領域とした首長であり、墓域を領域内の荒神山丘陵上に求めたと考えることもできる。このような考えは、孤立的なあり方をするとみる限り一定の妥当性をもつ。ただし、当該地域内における荒神山古墳前後の首長墓の動向については、近年少しずつではあるものの、以下に示すように、新たな資料や解釈が示されており、いまだ即断を許さない流動的な状況にあると考えている。

荒神山古墳群採集埴輪 最近採集された本事例は、断片的な資料であることに加え、円筒埴輪を欠くために、荒神山古墳との先後関係を含めて、詳細な時期決定は難しい。ただし、わずかに確認された黒斑の存在と、焼成・色調からうける印象に基づき、窰窯導入以前の可能性が高いと考えて、本段階に位置づけるものである。

本例は、以下に述べるように、当該地域の古墳動向を考えるうえで、重要な意味をもつ。採集地点に最も近い古墳である荒神山古墳群山王谷支群13号墳は後期群集墳の構成墳であり、時期的にみて本埴輪群の帰属先には想定しがたい。そうなると、採集地点付近に当該期の古墳が存在したとみるのが穏当であろう。古墳時代前・中期の間に丘陵上に古墳が築造された後、後期に群集墳が重複して造営された可能性を想定しておきたい。この位置づけが妥当とするならば、荒神山古墳に先行もしくは後出する埴輪樹立古墳の存在が本資料によって想定できることになり、その様相いかんによっては、荒神山古墳の位置づけを含めて、当該

地域の古墳時代像が大きく変更される可能性が生じる。この点が本資料の最大の意義といえる。

ただし、想定される埴輪樹立古墳について、より具体的な検討を行うには、当然ながら本資料だけでは十分とはいえない。この点については、周辺一帯の詳細な分布調査とともに詳細地形測量調査が必要となる。

「塚村古墳」の存否 当該地域の首長墓に関するもう一つの問題がある。それは、荒神山丘陵の南麓に推定される「塚村古墳」の存否をめぐる問題である。

1874（明治6）年の村絵図を題材として、塚村の位置する微高地とその周辺の地割を検討した佐野静代氏は、以下のような指摘を行っている。

（引用者註：塚村を構成する二か所の集落域のうち）「南側の塊状の集落は、特異な立地形態を示している点で注目される。集落の形態は底辺を持った楕円形を呈しており、その周りを水路が取り巻いている。さらにその外側には、細長い帯状の地割が一定の幅をもって取り囲んでいる。このような形態から推察されるのは、周辺耕地よりも小高くなっているこの集落部分が前方後円墳の墳丘を削平したものであり、周囲を取り巻く水路と帯状地割は周濠の名残ではないか、という視点である。（中略）このことは、塚村の名の由来にも関連しており、地元では、この村名は大古墳があったことに由来すると伝承している」（佐野2001、p75）。

田中勝弘氏は、より具体的に、全長105m、周濠を含めると全長158mにおよぶ中期の大型前方後円墳を想定している（田中2007）。

確かに、絵図資料や地形図の地割は前方後円墳の存在を示しているようにもみえる。しかし、それ以外には、周辺では埴輪等の遺物が採集されたこともなく、積極的に古墳とする確証はえられていない。琵琶湖周辺地域における中期古墳のうち、100mを前後する規模の前方後円墳としては、長浜古墳群中の長浜市長浜茶臼山古墳（全長約92m、辻川2003D）と、全長100m程度に復元しうる余地のある米原市村居田古墳（辻川2006B）、栗太郡の椿山古墳（全長約99m、大崎1994）を除くと他にない。「塚村古墳」の実態いかんによっては、荒神山古墳との関係を含めた当該地域の首長墓動向のみならず、琵琶湖周辺地域全体の古墳時代像を大きく変更する可能性がある。古墳としての当否を含め、確認調査が実施される必要があるだろう。

以上のように、採集埴輪から想定される荒神山古墳群中の古墳や、実態の判然としない大型前方後円墳－「塚村古墳」といった不確定要素があるために、本段階の当該地域の様相を解明する段階には至っているとはいえないのが現状である。荒神山古墳の前後の状況を明らかにしない限り、荒神山古墳の位置づけも十分なしがないはずである。詳細地形調査や確認調査を実施することで、不確定要素を少しでも減らしていくことが今後の課題であろう。

（2）中期後半

つぎに、荒神山古墳以降、中期（Ⅲ・Ⅳ期）の埴輪の様相については、先述したとおり、埴輪を樹立するような首長墓の事例を欠くという資料的制約によって知りたい。

ただし、八坂東遺跡出土埴輪については、A区出土の盾形埴輪の盾面と円筒部の接合方法（田中1994）等からみて、後期に下しがたいことや、B区出土の2群円筒埴輪が外面二次調整としてヨコハケを施す窖窯焼成品であることから、Ⅳ期に位置づけられる余地を残している。このことは、周辺に埴輪樹立墳が存在したことを示唆するものである。

琵琶湖周辺の他地域では、窖窯導入以降になると、中小古墳での埴輪樹立例が増加する傾向を見出している。当該地域においても、沖積平野部での調査の進展により、今後埋没古墳例が発見される可能性を考慮すれば、中期－とくに後半段階の埴輪の「空白」が埋められることは否定できない。この点については、今後の調査の進展を注視したい。

（3）後期

埴輪樹立墳の増加 後期になると、埴輪樹立墳例がさらに増加する傾向をみせる。それにあわせて、形象埴輪が本格的に導入されたようである。これらの埴輪樹立墳の実態は、十分に把握できているわけではないけれども、なまず1号墳の例などを参考にすると、大型古墳というよりも、中小古墳である可能性が高い。このような傾向は、当該地域のみならず、琵琶湖周辺地域において確認できる。

複数系統の併用現象 当該期の埴輪の展開において、特徴としてあげられるのは、複数系統の埴輪が併用されている点であろう。つまり、後期初頭には、B種ヨコハケ調整を施した中期的な2群円筒埴輪が継続するとともに、二次調整を省略した3群円筒埴輪（いわゆる「V群系」埴輪、鐘方2003）が出現する。これらに加えて、須恵器系埴輪の一種である4群円筒埴輪も用いられているのである。具体的に述べると、愛知川下流域の扇状地末端から沖積平野部におよぶ一帯では、沖の矢古墳（2群）、塚乞手古墳・ゲホウ山古墳（3群）、なまず1号墳（4群）というように、複数系統の埴輪が併用されている⁽⁶⁾。そのうち、ゲホウ山古墳を除く三古墳は約1km圏内に収まり、築造当時互いに視認できる程度の距離である。

野洲・長浜地域における併用現象 このように、一定地域内の古墳において複数の技術系統の埴輪が用いられていたり、あるいは一古墳において複数系統の埴輪が併用されていたりする現象は、野洲地域や長浜地域においても確認できる。野洲地域においては、近畿中央部に通有の円筒埴輪（3群）、大和南部・紀ノ川下流域に主に分布する「大和南部・紀伊型」円筒埴輪に加えて、須恵器系埴輪が併用されている（辻川2010B・2011）。長浜古墳群においても、後期初頭～前葉頃には、垣籠古墳で須恵器系埴輪が用いられる一方で、上寺地古墳では3群の円筒埴輪が用いられて

いる（辻川2003A・2003D）。

このように、複数系統の埴輪が併用される現象は、琵琶湖周辺地域—なかでも、その東岸部においては、さほど珍しくないことがわかってきた。

併用現象と埴輪生産 こうした複数系統の併用現象からは、たとえば愛知郡内において、特定の埴輪生産工房があり、そこで特定の埴輪製作集団が生産に従事し、供給したという状況は考えがたい。むしろ、少なくとも3つの技術系統の工人が、それぞれの古墳の造営にあたって埴輪を製作し、供給したと考えるほうが実態に即しているように思う。

それでは、このような埴輪生産のあり方の背景はいかなるものであったのだろうか。この点を考えるうえで注目したいのは、なまず1号墳の須恵器系埴輪である。本事例は、回転ヨコハケ調整を用いる等、回転台上での製作を前提とする技法が用いられた須恵器系埴輪である。さらに、埴輪群のなかには、確実に倒立技法が用いられている個体が確認できた。このような特徴は、尾張地域に特有の「尾張型埴輪」（赤塚1991）や「猿投型円筒埴輪」（藤井2006）とされる須恵器系埴輪と共通する部分が多い。

近年、琵琶湖周辺地域を含む琵琶湖・淀川水系に、後期前葉頃を中心として、この種の須恵器系埴輪が拡散する現象が見出され、梅本康広氏（梅本2007）・東影悠氏（東影2009）等によって検討が進められている。辻川も、拡散時期がいわゆる後期前葉頃に限定されること、琵琶湖・淀川水系での出土古墳が継体関連伝承地と重複すること等の点から、この須恵器系埴輪の拡散現象について、継体擁立・支持勢力の首長ネットワークを前提として、尾張地域の尾張型埴輪の製作技術が西方に波及したと解釈した（辻川2006A）⁽⁷⁾。本例についても、こうした首長ネットワークを介して、この種の須恵器系埴輪の製作工人を呼び寄せ、製作にあたらせた事例の一つとして解釈しておきたい。

併用現象が示すもの つまり、当該期にみとめられた複数系統の埴輪併用現象は、個々の中小古墳の被葬者（首長）がそれぞれの取り結んだ首長ネットワークを介して、個別に埴輪製作工人を確保した状況を反映すると考えるのである。以上からは、当該地域においては、特定首長を頂点とする階層構造を形成していたというよりも、むしろ中小古墳の首長が林立していた状態が想定できる。

湖東北部地域の場合、中期の様相が判然としないため、こうした後期の状態がいかに成立したのか十分に検討しえない。しかし、琵琶湖周辺の他地域では、中期段階の首長系譜が後期になって断絶し、新たな中小規模の首長墓が出現することがわかっている。後期初頭～前葉頃を中心とする雄略・継体期の政治的変動を受けて、琵琶湖周辺地域においても、新興の中小首長層が林立する状態へ変化したという見通しを示しておきたい。ただし、この点については、当該地域のみでは決しえない課題であり、視野を広げたいので、稿をあらためて論じるつもりである。

埴輪の終末 当該地域において、最新の埴輪となる可能性があるのは、北落古墳群X2周濠例である。わずか2点のみの出土であり、後期群集墳の一構成墳であるX2に伴うのかどうか不安の残る資料である。ただし、周辺の蒲生郡域では、TK43型式に併行する須恵器を出土した東近江市天狗前10号墳（齊藤1992）において、確実な円筒埴輪の樹立が確認されており、少なくとも、この段階までは埴輪の樹立がなされていたことを知りうる。当該地域の埴輪の終末時期については、今のところ、天狗前10号墳をもって確実な事例とし、北落古墳群X2周濠内出土事例についても、少数が樹立されていた可能性を指摘しておきたい。

5. おわりに

今回対象とした湖東北部地域は、琵琶湖周辺地域のなかでも、とくに前半期古墳の様相が判然とせず、埴輪資料が乏しい印象があった。しかし、近年の調査によって、少しずつではあるものの、資料は確実に増加しつつある。今回は、そうした新出資料とともに、既存資料の資料化と再検討を行ってきた。その結果のなかでも、荒神山古墳の位置づけをはじめ、当該地域の古墳動向が琵琶湖周辺地域全体の理解に影響をおよぼす可能性がある等、多くの課題を抱えた地域であることをあらためて強調しておきたい。資料的制約もあって、明確な結論を出すにはいたらず、課題の提起にとどまった点は十分承知している。これらの諸課題については、稿をあらためて検討することを期して、ひとまず本稿を終えることにしたい。

〔付記〕本稿の作成にあたっては、以下の方々よりご指導を得たほか、関係機関には資料調査のさいに御配慮を賜った。記して厚く謝意を表したい（敬称略・50音順）。

内田保之・梅本康広・門脇正人・北原 治・重田 勉・神保忠宏・竹村吉史・谷口 徹・畑中英二・花田勝広・林 昭男・早川 圭・細川修平・堀 真人・三尾次郎・三井義勝・三宅 弘

愛荘町教育委員会・愛荘町立歴史文化博物館・滋賀県教育委員会・滋賀県埋蔵文化財センター・彦根市教育委員会

註

- (1) 以下、埴輪の記述に関しては、川西幸氏の業績（川西1988）に多くを拠っている。また、須恵器編年は、田辺昭三氏による大阪南部（陶邑）窯跡群編年（田辺1981）に基づく。
- (2) 本古墳の名称については『平成13年度版滋賀県遺跡地図』（滋賀県教育委員会編2002）では「長塚古墳」とされている。しかし、「長塚古墳」と称する古墳は他にも多数存在するために、「秦荘長塚古墳」と称して、区別することにした。本来ならば、大字名を冠すべきであるけれども、当該大字名が「長塚」であるため、旧町名である「秦荘」を冠した。
- (3) 開墾時期を明治16年としている点は、『郡志』の明治14・5

年という記述と異なる。

- (4) 本古墳の名称については『平成13年度版滋賀県遺跡地図』（滋賀県教育委員会編2002）では「狐塚古墳」とする。しかし、同名の古墳は県内外を含め他に存在する。よって、本稿では大字名を冠して「香之庄狐塚古墳」と呼称して区別する。
- (5) 花田勝広氏には、採集資料を御恵贈いただいたうえ、実測と本誌への掲載を御快諾いただいた。厚く御礼申し上げます。
- (6) 塚乞手古墳とゲホウ山古墳の円筒埴輪は、「逆U字+直線」から構成されたヘラ記号が口縁部外面を施す事例を含む点で共通する。ハケメ原体の同定作業等詳細な検討を行っていないけれども、いずれも3群の円筒埴輪であり、形態的にみても両者の間にさほどの距離感を感じられないことから、同一製作集団、もしくは近い関係にあった製作集団の手による可能性がある。
- (7) 琵琶湖周辺地域には、当該期の須恵器系埴輪が確認されているけれども、そのすべてが尾張型埴輪の影響によって説明できるわけではない。たとえば、東近江市大塚古墳出土埴輪には、尾張型埴輪とは別系統の須恵器系埴輪である、いわゆる「淡輪系」円筒埴輪が含まれている（辻川2007A）。しかし、淀川流域周辺の諸事例のなかには、尾張地域の工人との関わりによって説明できる例が含まれていると考えている。この点については、別稿において論じる予定である。

文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年順）

愛荘町立歴史文化博物館編（2010）『明治の古地図－愛荘町－』（愛荘町歴史文化資料集第6集）

赤塚次郎（1991）『尾張型埴輪について』『池下古墳』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集）愛知県埋蔵文化財センター

一瀬和夫（1992）『古市古墳群における埴輪群の変遷－大型古墳を中心として－』『究斑』埋蔵文化財研究会

梅本康広（2007）『淀川流域の東海系埴輪とその製作動向』『埴輪論叢』6、埴輪検討会

愛知川町史編集委員会編（2007）『近江・愛知川の歴史 第四巻 ビジュアル資料編 分冊三』愛荘町

大崎隆志（1994）『椿山古墳』『栗東の歴史 第四巻 資料編Ⅰ』栗東町役場

小栗明彦（1992）『埴輪倒立技法の諸問題』『史学研究集録』17、國學院大學大学院日本史学専攻大学院会

鐘方正樹（2003）『円筒埴輪の地域性と工人の動向』『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』第52回埋蔵文化財研究会実行委員会

川西宏幸（1988）『円筒埴輪総論』『古墳時代政治史序説』塙書房

北村圭弘（1995）『八坂東遺跡』（仮）滋賀県立大学整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

北村圭弘（1996）『木曾遺跡』（ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XXⅢ－2）滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

会

北村圭弘・小竹森直子・神保宏忠・辻川哲朗（1995）『普光寺遺跡・屋中寺遺跡』（土地改良総合整備関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ－2）滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

北原 治（2008）『長野遺跡Ⅲ』（県道愛知川彦根線単独道路改築事業に伴う発掘調査報告書）滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

木下 亘・奥田 尚・酒井温子・今津節生（1996）『附篇2 上の山古墳』『中山大塚古墳』（奈良県立橿原考古学研究所調査報告第82冊）奈良県立橿原考古学研究所

斉藤博史（1992）『町内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』（蒲生町文化財資料集16）蒲生町教育委員会

佐野静代（2001）『5 下平流・延寿寺・塚』、彦根市史編纂委員会編『彦根 明治の古地図 一』彦根市

滋賀県教育委員会編（2002）『平成13年度版滋賀県遺跡地図』滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会（1936）『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』

重田 勉（2006）『八坂東遺跡』（滋賀県立大学人間看護学部整備事業に伴う発掘調査報告書）滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

高橋克壽（1992）『近江の埴輪と畿内の埴輪』『滋賀県埋蔵文化財センター紀要 昭和63年度』滋賀県埋蔵文化財センター

田中勝弘（2007）『第2章 大和政権と近江』『新修彦根市史 第1巻 通史編 古代・中世』彦根市

田中秀和（1994）『畿内における盾形埴輪の検討－革盾模倣盾形埴輪を中心として－』『大阪市文化財論集』財団法人大阪市文化財協会

田辺昭三（1981）『須恵器大成』角川書店

谷口 徹・林 昭男（2010）『荒神山古墳』（彦根市文化財調査報告書第2集）彦根市教育委員会

辻川哲朗（2003A）『長浜市垣籠古墳の再検討』、松藤和人編『考古学に学ぶ（2）』（同志社大学考古学シリーズⅦ）同志社大学考古学シリーズ刊行会

辻川哲朗（2003B）『近江地域の円筒埴輪編年』『埴輪論叢』4、埴輪検討会

辻川哲朗（2003C）『突帯－突帯間隔設定技法を中心として－』『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』第52回埋蔵文化財研究会実行委員会

辻川哲朗（2003D）『長浜古墳群の埴輪』『北近江』1、北近江古代史研究会

辻川哲朗（2006A）『近畿北半部の須恵器系埴輪』『考古学ジャーナル』544、ニューサイエンス社

辻川哲朗（2006B）『米原市村居田古墳の再検討』『紀要』19、財団法人滋賀県文化財保護協会

辻川哲朗（2006C）『近江の須恵器系埴輪』『淡海文化財論叢 第一輯』淡海文化財論叢刊行会

辻川哲朗（2007A）『東近江市大塚古墳採集の須恵器系埴輪について』『淡海文化財論叢 第二輯』淡海文化財論叢刊行会

辻川哲朗（2007B）「彦根市大堀山採集の埴輪について」『紀要』
20、財団法人滋賀県文化財保護協会

辻川哲朗（2009）「近江八幡市西車塚古墳出土埴輪・須恵器について」『埴輪研究会誌』13、埴輪研究会

辻川哲朗（2010A）「安土山・織山周辺の埴輪」『紀要』23、財団法人滋賀県文化財保護協会

辻川哲朗（2010B）「近江・林ノ腰古墳の再検討」『同志社大学考古学研究会50周年記念論集』50周年記念論集編集委員会

辻川哲朗（2011）「近江・富波亀塚古墳出土埴輪の再検討」『琵琶湖と地域文化』（林博通先生退任記念論集）林博通先生退任記念論集刊行会

辻川哲朗・内田保之（2010）「塚乞手古墳出土の埴輪と木製立物について」『肥田城遺跡・肥田西遺跡・鶴田遺跡』（ほ場整備関係（経営体育成基盤整備）遺跡発掘調査報告書37-1）滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

辻川哲朗・林 昭男（2011）「荒神山古墳群山王谷支群13号墳周辺採集の埴輪について」『平成21年度彦根市文化財年報』彦根市教育委員会文化財部文化財課

中川泉三編（1929）『愛知郡志 卷壱』滋賀縣愛知郡教育會（1981年弘文堂書店による復刊本に拠る。）

秦荘町史編纂委員会編（2005）『秦荘の歴史 第一巻 古代・中世』秦荘町埴輪検討会（2003A・B）『埴輪論叢』4・5

林 昭男（2010）『竹ヶ鼻廢寺Ⅳ』（彦根市埋蔵文化財調査報告書第45集）彦根市教育委員会

林 定信（1986）『島川遺跡発掘調査概要報告書』（秦荘町文化財調査報告書第3集）秦荘町教育委員会

東影 悠（2009）『尾張系埴輪の製作技術と生産体制』（『橿原考古学研究所論集第十五』）八木書店

廣瀬雅信・地村邦夫・井西貴子・高橋克壽（1992）『萱振遺跡』（大阪府文化財調査報告書第39輯）大阪府教育委員会

藤井康隆（2006）「尾張における円筒埴輪の変遷と「猿投型円筒埴輪」-「尾張型埴輪」の再構築-」『埴輪研究会誌』10、埴輪研究会

堀 真人・内田保之・辻川哲朗・細川修平（2010）『肥田城遺跡・肥田西遺跡・鶴田遺跡』（ほ場整備関係（経営体育成基盤整備）遺跡発掘調査報告書37-1）滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

堀 真人（2000）『段ノ東遺跡』（新生産調整推進排水対策事業に伴う発掘調査報告書）滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

吉田野々（1999）「畿内における壺形埴輪からの一試考—古墳時代の中河内地域の動向を中心に—」『埴輪論叢』1、埴輪検討会

用田政晴（1992）『北落古墳群』（県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅶ-2）滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

挿図典拠

図1 国土地理院1/200,000地形図「名古屋」をベースマップとして、辻川作成。

図2 北村他1995に拠り、一部改変。

図3 谷口他2010に拠り、辻川作成。

図4 谷口他2010に拠り、一部改変。

図5 辻川他2011に拠り、一部改変。

図6 堀他2009に拠り、一部改変。

図7 北原2008に拠り、一部改変。

図8 円筒埴輪（1・2）辻川実測。朝顔形埴輪（3）・馬形埴輪（4）は愛知川町史編集委員会編2007掲載写真に拠り、辻川作成。

図9 【島川遺跡】埴輪（1～9）・須恵器（11）は辻川実測。埴輪（10）は林1986に拠る。【秦荘長塚古墳】「秦荘長塚古墳周辺の大字・小字図」は愛荘町立歴史博物館編2010に拠り、一部改変。「古墳周辺の地割図」は愛荘町立歴史文化博物館編2010掲載の「長塚村地検取調総図」に基づき、辻川作成。墳丘実測図は秦荘町史編纂委員会編2005に拠る。須恵器は秦荘町史編纂委員会編2005に拠る。

図10 写真は中川編1929に拠り、一部改変。埴輪（1～4）は、中川編1929掲載写真に基づき、辻川作成。埴輪（5）は花田勝広氏採集、辻川実測。「大字香之庄小字図」は愛荘町立歴史文化博物館編2010に拠り、一部改変。「字中道の地割と香之庄狐塚古墳推定地」は愛荘町立歴史文化博物館編2010掲載の「香之庄村地券取調総図」に基づき、辻川作成。

図11 【八坂東遺跡】1～5は辻川実測。6・7は重田2006に拠り、8・9は北村1995に拠り、一部改変。【段ノ東遺跡】埴輪（2・3・11）は辻川実測。その他は堀2000に拠り、一部改変。【北落古墳群X2】用田1992に拠り、一部改変。

図12 【大堀山古墳群】辻川2007Bに拠り、一部改変。【木曾遺跡3T】1は拓本のみ北村1996に拠り、その他は辻川実測。2は北村1996掲載図に辻川実測断面図を追加。【竹ヶ鼻廢寺4次調査SD13】林2010に拠り、一部改変。

図13・14 辻川作成。

表典拠

表1・2 辻川作成。

（つじかわ てつろう：調査整理課 主任）

【編集後記】

本号は、当協会設立40周年を記念する特別号として、ボリュームアップをはかり、職員全員に投稿を呼び掛けたところ、総数17本を掲載することができた。

今回は、近年の注目すべき調査事例である東近江市相谷熊原遺跡に関連した3本の論考をまとめ、小特集とした。松室論文では、相谷熊原遺跡を縄文時代草創期と位置づける根拠となった「矢柄研磨器」について基礎的な検討を行っている。重田論文では、相谷熊原遺跡をはじめとする鈴鹿山中の諸遺跡について、選地原理の抽出を試みた。一方、出土遺物のなかでも特徴的な土偶について、瀬口論文では学説史をたどり、その評価の基礎固めをはかった。こうした検討を進めて、次年度以降、調査報告書刊行に向けて、整理調査を行っていききたい。

その他の論考は、時代・対象ともに実に多様なものとなった。縄文時代を対象としたものに、県内出土縄文土器の資料化と検討を行った小島論文、志那湖底遺跡出土岩田第4類土器群について検討を進めた小竹森論文がある。古墳時代では、辻川論文で県内出土埴輪の資料化と検討作業を行っている。古代を対象としたものには、これも近年の注目すべき調査事例－長浜市塩津港遺跡出土起請文木札に関し、基礎的な検討を行った濱論文や、柱穴構造から掘立柱建物の上部構造について意欲的に復元を試みた横田論文、県内に特徴的な飛雲文軒瓦の比較資料として三重県内の出土事例を報告した中西論文がある。中・近世を主な対象としたものとしては、湖南省夏見城遺跡出土毛抜きを位置づけることを目的として、毛抜きをはじめとした全国の化粧道具出土事例に関する検討作業をおこなった堀論文や、東近江市観音寺城遺跡の構造に関して再検討した伊庭論文、出土将棋駒を手掛かりに将棋史の一端に迫った三宅論文がある。さらに、阿刀論文では、滋賀県立安土城考古博物館での展示に携わったなかで見出された「忍者」研究について現状と課題がとりまとめられている。大沼論文では、琵琶湖を「文化遺産」として捉え、様々な側面からそれを構成する「資産群」の文化的価値について評価した結果、人類にとって「顕著な普遍的価値」を有する遺産であると結論付けている。具志堅論文では、当協会が重点的に推進する普及・活用・体験学習の一環として、本年度に実施した体験学習の内容と課題について報告し、中川論文では30年にわたる滋賀県における保存処理を振り返り、現状と課題を整理している。

近年、埋蔵文化財をはじめ文化財に対する需要は多様化し、求められる成果のレベルも高くなってきていることを痛感する。このようなニーズに的確に応じていくためには、職員一人一人の資質の向上が不可欠であることはいうまでもない。埋蔵文化財のみならず、地域の文化財の多様な側面に切り込み、その価値を見出すとともに、それを広く理解していただけるように伝える能力が今まで以上に必要となっている。本紀要も、そうした能力・経験・知識の獲得と蓄積、情報の発信の手段の一つとして位置付けている。

掲載論考の内容は未だ十分なものとはいえないことは承知しているが、読者の皆様には温かいご意見・ご批判を重ねてお願いする所である。

編集担当（T-T）

紀 要 第24号 —設立40周年記念号—

刊行年月日：平成23年（2011年）3月31日

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会

520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

(tel) 077-548-9780 (fax) 077-543-1525 (e-mail) mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本：三星商事印刷株式会社

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.24 2011.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage